稲羽北遺跡発掘調査報告書

1983

長野県東信土地改良事務所
長野県小県郡丸子町教育委員会

信州大学人文学部

稲羽北遺跡発掘調査報告書

1983

長野県東信土地改良事務所
長野県小県郡丸子町教育委員会

序

丸子町塩川地区は、塩川沖をはじめとする広大な水田地帯をかかえ、町内でも重要な稲作地帯といえますが、ここに地元農家のみなさんの要望により、県営圃場整備事業が大規模に実施されることになりました。

この圃場整備事業により、区域内の埋蔵文化財包蔵地・稲羽北遺跡が破壊されますので、発掘調査をして記録保存を図ることとなり、事業主体である長野県東信土地改良事務所から発掘調査の委託を受けた丸子町教育委員会では、丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団を組織し、発掘調査を実施しました。

その結果、多量の土器片や土鈴及び古銭などの遺物のほか、奈良時代から鎌倉時代にかけての住居址や土壙などが発見され、この地方の古代・中世史解明のうえに貴重な成果をあげることができました。

真夏の酷暑のもと、時間の制約がある厳しい条件のもとで行われた調査でありました。調査にたずさわった関孝一団長ほか調査員諸氏、作業員のみなさんがたのご苦労はなみなみならないものであったろうと思います。

また、調査にあたっては、長野県教育委員会や東北新幹線赤羽地区遺跡調査会のみなさん、長野県東信土地改良事務所・地元実行委員会などの圃場整備事業関係者のみなさん、地元瑞穂団地や狐塚区のみなさんなど、多くの機関や人々の御協力をいただきました。厚くお礼申しあげます。

丸子町教育委員会教育長　吉　池　欽　郎

例　　言

1．本書は、長野県営塩川沖圃場整備事業昭和58年度工事に先立ち実施された、稲羽北遺跡の発掘調査報告書である。

2．各章の執筆分担は次のとおりである。

第１章　発掘調査の経過……竹内一徳

第２章　遺跡

第１節　遺跡の立地……竹内一徳

第２節　歴史的環境……竹内一徳

第３節　遺跡の状態……滝沢敬一

第３章　遺構……滝沢敬一

第４章　遺物……赤沢徳明、山本典幸

第５章　まとめ……関　孝一

3．出土遺物の整理については、東北新幹線赤羽地区遺跡調査会の小林重義・村松篤・下津弘氏らの御指導を得た。実測図の遺構は滝沢敬一、遺物は赤沢徳明・山本典幸がそれぞれ作成した。また、写真は遺構を滝沢敬一・赤沢徳明が、遺物は村松篤・下津弘・赤沢徳明・山本典幸が撮影した。

4．遺物・実測図・写真等すべての資料は丸子町教育委員会が保管している。

5．この調査にあたっては、非常に多くの機関や方々の御指導、御協力を得た。以下御芳名を記して深甚なる感謝の意を表したい。

〔機関〕

長野県教育委員会、長野県東信土地改良事務所、東北新幹線赤羽地区遺跡調査会、国学院大学、丸子町役場農林課、県営塩川沖圃場整備実行委員会、塩川瑞穂団地自治会、長野県立丸子実業高等学校

〔個人〕

郷道哲章、小林重義、大谷猛、中田節子、木下亘、村松篤、下津弘、酒井信一

目　　次

序
例　言
目　次
第１章　発掘調査の経過……1
　第１節　発掘調査に至るまでの経過……1
　第２節　発掘調査団の構成……2
　第３節　発掘調査日誌……2
第２章　遺　跡……9
　第１節　遺跡の立地……9
　第２節　歴史的環境……11
　第３節　遺跡の状態……15
第３章　遺　構……17
　第１節　第Ⅰ区……18
　第２節　第Ⅱ区……22
　第３節　第Ⅲ区……26
　第４節　第Ⅳ区……31
第４章　遺　物……32
第５章　まとめ……46

挿　図　目　次

第１図　稲羽北遺跡周辺の地形図……10
第２図　稲羽北遺跡周辺の地質図……10
第３図　依田川下流域の遺跡分布図……12
第４図　稲羽北遺跡の土層断面図……16
第５図　稲羽北遺跡遺構全体図……17
第６図　第Ⅰ区ピット及び土壙実測図……18
第７図　第Ⅰ区１号住居址実測図……21

第８図　第Ⅱ区遺構実測図……23
第９図　第Ⅱ区１号住居址実測図……24
第10図　第Ⅱ区２号住居址実測図……25
第11図　第Ⅱ区３号住居址実測図……26
第12図　第Ⅱ区４号住居址実測図……27
第13図　第Ⅲ区Ｂグリットピット及び土壙実測図……28
第14図　第Ⅲ区Ａグリット土壙実測図……29
第15図　第Ⅳ区ピット及び土壙実測図……30
第16図　須恵器、灰釉陶器及び円面硯実測図……33
第17図　弥生土器及び須恵器実測図……34
第18図　須恵器拓本……35
第19図　土師器実測図……36
第20図　土師器及びカワラケ実測図……37
第21図　土鈴実測図及び古銭拓本……38
第22図　羽口実測図……39
第23図　石器及び砥石実測図……40

表　目　次

第１表　依田川下流域の遺跡地名表……13
第２表　ピット群計測値一覧表……19
第３表　出土土器一覧表……41
第４表　出土羽口一覧表……44
第５表　石器一覧表……45

図　版　目　次

図版１　１　遺跡の遠景（千曲川対岸から）
　　２　遺跡から塩川条里方面を望む

図版２　１　第Ⅰ区のピット及び土壙の配列状態（発掘前）
　　２　第Ⅲ区Ｂグリットのピット及び土壙の配列状態（発掘前）
図版３　１　第Ⅲ区Ｂグリットのピット及び土壙（南から）
　　２　第Ⅳ区ピット群（北から）
図版４　１　第Ⅲ区Ａグリット北壁土層の堆積状態
　　２　第Ⅳ区北壁土層の堆積状態
図版５　１　第Ⅰ区１号住居址（北から）
　　２　第Ⅰ区１号住居址のかまど
図版６　１　第Ⅱ区１号住居址と２号土壙（南東から）
　　２　第Ⅱ区２号住居址と３号住居址（南から）
図版７　１　第Ⅱ区３号住居址のかまど（南から）
　　２　第Ⅱ区３号住居址土器出土状態
図版８　１　第Ⅱ区６号ピット土器（小型坏）出土状態
　　２　第Ⅱ区18号ピット銅銭出土状態
図版９　１　第Ⅱ区４号住居址（南から）
　　２　第Ⅱ区４号住居址内３号ピット（炭だめ）（左：発掘前・右：発掘後）
図版10　１　第Ⅱ区４号住居址内組石（東から）
　　２　第Ⅱ区羽口出土状態
図版11　１　第Ⅱ区３号土壙（東から）
　　２　第Ⅲ区１号土壙（北から）
図版12　　土師器　甕
図版13　１　内黒土器・甕底部(表)
　　２　内黒土器・甕底部(裏)
図版14　１　須恵器　甕・坏
　　２　須恵器　坏・蓋・円面硯
図版15　　須恵器　甕
図版16　　石鏃，打製石斧，砥石・石製支脚，羽口
図版17　１　土鈴
　　２　古銭

第1章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査に至るまでの経過

長野県小県郡丸子町塩川地区は条里遺構をはじめとする約18ヵ所の遺跡をかかえ、歴史的にも「塩川牧（しおがわのまき）」の存在が考えられるなど、この地方の歴史解明のうえにきわめて重要な地域である。しかし、農業の近代化をはかろうとする県営圃場整備事業が、昭和57年度から68年度までの間に、約10億9,000万円の費用で、延べ114haにわたって実施される計画がたてられた。

そのため、塩川条里遺構や多くの埋蔵文化財が破壊されるので、丸子町教育委員会では、昭和51年から53年にかけて文化庁及び長野県教育委員会の援助を得て条里遺構を調査し、さらに昭和56年には町費で塩川地区埋蔵文化財分布調査を実施した。これらの基礎調査に基づき県営圃場整備事業と埋蔵文化財保護の調整が、長野県東信土地改良事務所と長野県教育委員会文化課との間で協議され、区域内遺跡の保護については発掘調査を実施して記録に残すこととされた。

この協議では、稲羽北遺跡・市の町遺跡・古免（ふるめん）遺跡・宮前遺跡・二反田遺跡の発掘調査と、塩川条里遺構の土層確認調査を実施することが決められ、丸子町教育委員会が、丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団を組織し、実施することになった。なお、発掘調査に伴う経費は、事業主体者である長野県東信土地改良事務所が負担し、農家負担分については丸子町が国・県の補助金を得て負担することになった。

この稲羽北遺跡の発掘調査は塩川地区における最初の調査であり、調査時期は地元農家の意向をうけて、8月上旬から下旬にかけて実施されることになった。発掘調査に至るまでの経過は次のとおりである。

昭和58年6月15日（水）から7月27日（水）の間に、遺跡全体の測量と試掘確認調査を実施した。また併行して、発掘器材の準備や作業員の募集を滝沢と竹内が主になり行った。続いて7月28日（木）から7月31日（日）の4日間に、滝沢、竹内ほか作業員1名により調査区域を設定し、グリットの杭打ちを行った。

発掘調査の事前準備完了に伴い、8月1日（月）に調査団会議が行われた。会議には五十嵐・関・滝沢・赤沢・堀内・竹内・中山の調査団関係者諸氏及び、吉池教育長・大沢社会教育課長が出席した。

第２節　発掘調査団の構成

発掘調査に先立って編成された丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団は次のとおりである。

〔調査団〕

参　　与　　五十嵐幹雄

団　　長　　関　孝一

副 団 長　　塩入秀敏

調査主任　　滝沢敬一

調 査 員　　赤沢徳明、赤松　茂、児玉卓文、山本典幸、綿田弘実

作 業 員　　（一般）　井上良子、我山武春、川村寿一、北沢けさ子、芹沢良雄、竹花卓子吉池りょう子

（大学生）　池田誠司、上島久和、清水　謙、白井智香子、関　隆、土屋　隆平野雅司、宮沢美香、西沢克彦、山岸優子

（高校生）　雨宮千幸、上原　肇、太田博夫、金井広志、小相沢正治、小林千秋、小宮山文彦、斉藤房邦、坂口穂高、笹沢克之、清水昭彦、清水一洋、清水　洋、下村善之、白井和光、白井靖人、杉原和浩、関　幸次、高木俊文、滝沢保正、竹内基浩、竹花健司、竹花純一、飛田みえ子、戸堀　強、戸堀宏樹、中沢英治、中村大輔、成沢朋則、西沢潤一、根岸広志、畠山晃一、深井修一、藤原隆幸、北条　至、三浦啓司、南沢厚子、宮沢文雄、矢沢克晃、山岸由紀夫、山越浩一、山本　茂

〔事務局〕

事務局長　　堀内憲明

事務局員　　竹内一徳、中山睦子

監 査 員　　依田行安、大沢　馨

第３節　発掘調査日誌

８月２日（火）晴　　本日より発掘調査を開始する。作業開始に先立って結団式が行われ、吉池教育長のあいさつがあった。昨夜の激しい雷雨により、遺跡は冠水しており、排水や水抜き作業から始めた。午前10時頃から第Ⅰ区の発掘にとりかかったが難渋し、主力はほとんど水抜き作業に終始せざるをえなかった。〔関、滝沢、赤沢、竹内、中山ほか作業員50人参加。吉池教育長ほか２名見学〕

８月３日（水）晴　　第Ⅰ区と第Ⅱ区の発掘を実施した。遺物の出土が多かった。赤褐色土層の遺物をとりあげた。〔関、滝沢、赤沢、中山ほか作業員52人参加〕

８月４日（木）晴　　第Ⅰ～第Ⅲ区の発掘を実施した。第Ⅰ区では黒褐色土層下の赤褐色土

層まで掘り下げ、第３グリットから土壙らしいものを３ヵ所検出した。また第３グリットの東端から多量の土器とともに落ち込みが検出された。第Ⅱ区でもやはり円形の落ち込みがあり、第Ⅲ区ではＮ－14・Ｅ－４グリットから住居址らしい落ち込みを検出した。午後から第Ⅳ区の表土はぎにも着手した。〔五十嵐、滝沢、赤沢、中山ほか作業員47人参加〕

８月５日（金）晴　　第Ⅰ区と第Ⅱ区を精査し、遺構の写真撮影を行った。また、午後から第Ⅳ区の拡張を始めた。〔五十嵐、塩入、滝沢、赤沢、竹内、中山ほか作業員46人参加〕

８月６日（土）晴　　第Ⅱ区１～20グリットの発掘と、第Ⅰ区及びⅣ区の精査と遺構の写真撮影、並びに第Ⅲ区のセクション図の作成を行った。第Ⅱ区では11～20グリットにおいて特に出土遺物が多く、16グリットでは羽口が出土した。本日までの出土遺物は、須恵器・土師器・土師質土器・灰釉陶器　などがあり、発掘作業と併行して遺物洗いと注記を行うことにした。〔関、滝沢、綿田、赤沢、山本、赤松、竹内ほか作業員43人参加〕

８月７日（日）晴　　第Ⅰ区と第Ⅳ区の拡張及び第Ⅱ区と第Ⅲ区の掘り下げを行った。第Ⅰ区では第１号住居址とピット群が検出され、午後から掘り下げを行った。また、併行して遺構の全体測量を行い、第Ⅳ区の土壙とともに写真撮影をした。第Ⅱ区では鍛冶関係とおもわれる遺構を検出した。〔関、滝沢、綿田、赤沢、山本、赤松、竹内、中山ほか作業員37人参加〕

８月８日（月）晴　　第Ⅰ区では第１号住居址とピットを掘りあげ、実測と写真撮影を完了した。第Ⅱ区では遺構の検出作業を続行した。第Ⅲ区ではＡグリットの土壙を掘りあげ、実測と写真撮影を完了した。第Ⅳ区では土壙を掘りあげ、ピット群とともに実測と写真撮影を行った。なお午後から第Ⅲ区では拡張のための表土はぎを行い、Ｂグリットを設定した。第Ⅱ区から羽口、第Ⅲ区Ａグリットの土壙脇から土鈴が出土した。〔関、滝沢、綿田、赤沢、山本、赤松、竹内、中山ほか作業員44人参加〕

８月９日（火）晴　　第Ⅰ区で新たに検出されたピット及び土壙を掘りあげた。第Ⅲ区ではＢグリットのピット及び土壙の精査を行い、写真撮影を行った。またＡグリットの土壙を実測した。第Ⅳ区でもピット及び土壙の実測を行い、写真撮影を完了した。午後になってユンボを使い、調査区の農道以南の地点にトレンチを入れてみた。２点ほどの須恵器片を発見したが、遺構等は検出されなかった。土層を確認し、調査対象から除外することにした。〔関、滝沢、赤沢、山本、赤松、竹内、中山ほか作業員50人参加〕

８月10日（水）晴　　炎天下の発掘作業も終わりに近づいた。本日は第Ⅱ区の第１号住居址を掘り下げるとともに第２、第３号住居址の検出を行った。また第Ⅱ区のセクション図を作成した。器材の撤収作業を開始した。夜７時から瑞穂団地集会所にて、地元住民に調査報告会をもった。〔関、滝沢、赤沢、山本、赤松、竹内、中山ほか作業員21人参加〕

８月11日（木）晴午後雷雨　　第Ⅱ区の第２号住居址を掘り下げるとともに、第１号及び第３号住居址のカマド付近の実測を行った。また第４号住居址が検出され、全員で発掘にとりかかった。午後雷雨があり、瑞穂団地集会所で遺物整理を行った。夜７時から発掘調査報告書の

編集会議を行った。〔関、滝沢、赤沢、山本、赤松、竹内、中山ほか作業員20人参加。大沢社会教育課長は夜の編集会議に出席〕

８月12日（金）晴　　第Ⅱ区で発見された第４号住居址は鍛冶関係遺構と考えられ、煙道、炭溜めなどの施設を備えている。最後の力をふりしぼって発掘作業を督励し、午前中で完了した。午後は写真撮影と実測を行うとともに、遺物整理と器材の撤収を同時にすすめる。発掘終了後、作業員を対象に現地報告会を行った。〔関、滝沢、赤沢、山本、赤松、竹内、中山ほか作業員14人参加〕

なお、発掘調査後は各々資料を持ち帰り、整理作業を次のとおり分担した。

遺物の実測図及び写真図版の作成（赤沢、山本）

遺構の実測図及び写真図版の作成（滝沢、竹内）

また、報告書の原稿は例言で記したように分担して執筆することとし、12月17日（土）～12月19日（月）に各々持ち寄り報告書の編集を行った。〔関、滝沢、綿田、赤沢、山本、竹内参加〕しかし、部分的に資料や原稿を補充する必要が生じ、昭和59年１月14日（土）～16日（月）に最終的な編集を行った。〔関、滝沢、赤沢、山本、竹内参加〕

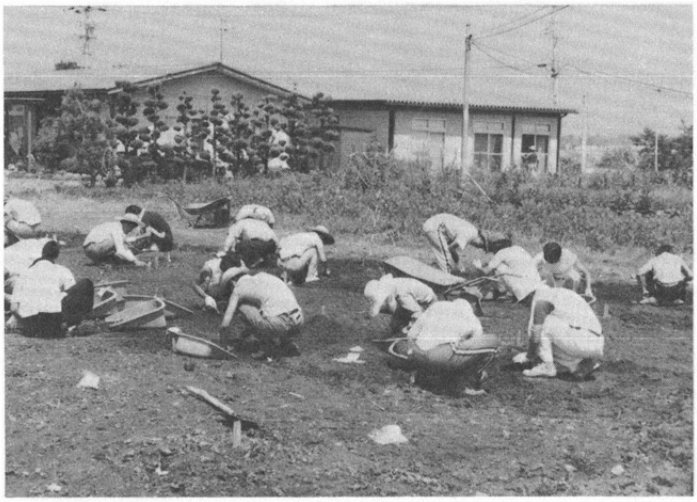
（写真１）発掘調査参加者

8月2日(火)
水抜き作業

8月3日(水)
第II区の発掘作業

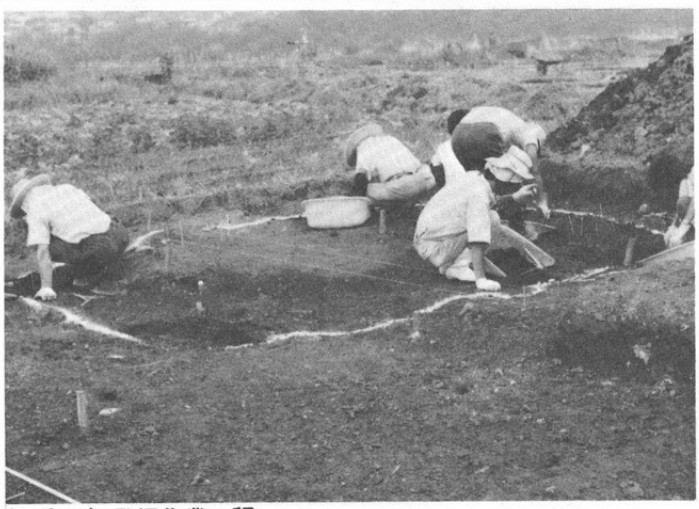
8月4日(木)
第I区の発掘作業

(写真2) 発掘作業工程



8月5日(金)
第Ⅰ区の発掘作業

8月6日(土)
第Ⅲ区の発掘作業

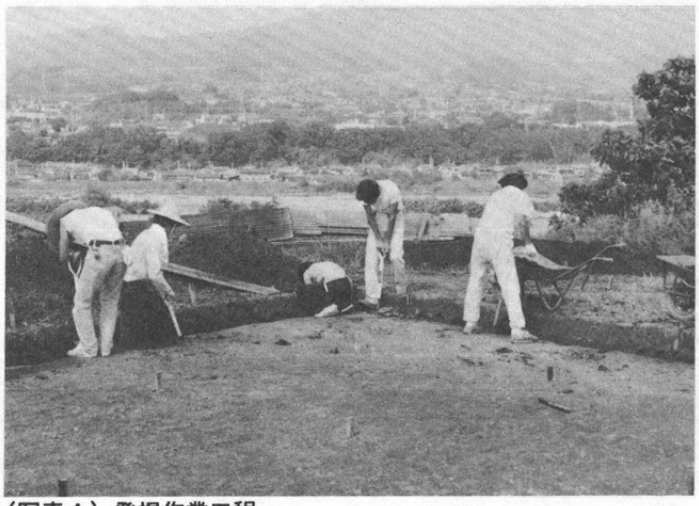


8月7日(日)
第Ⅰ区1号住居址発掘作業

(写真3) 発掘作業工程

8月8日(月)
第Ⅲ区拡張作業

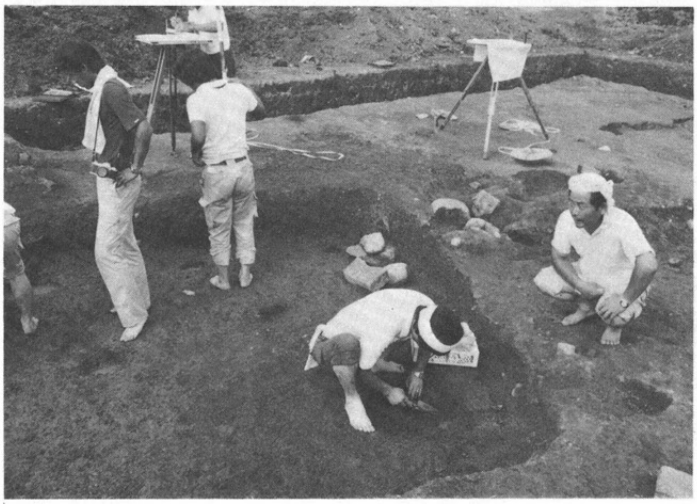
8月9日(火)
第Ⅱ区遺構検出作業



8月10日(水)
第Ⅱ区土層確認のトレンチ発掘作業

(写真4) 発掘作業工程

8月11日(木)
第II区4号住居址の発掘作業



8月12日(金)
第II区4号住居址の発掘作業

8月12日(金)
現地説明会

(写真5) 発掘作業工程

第２章　遺　　跡

第１節　遺跡の立地

稲羽北遺跡は長野県小県郡丸子町大字塩川字稲羽北に所在する。この地域は丸子町の北東部に属し、北に千曲川、西に依田川が流れるが、地形的な特徴をみると、次の三つに大別される（第１図）。

１、藤原田面（乏水性の強い高原性台地である）。

２、塩川面（千曲川の形成した河岸段丘である）。

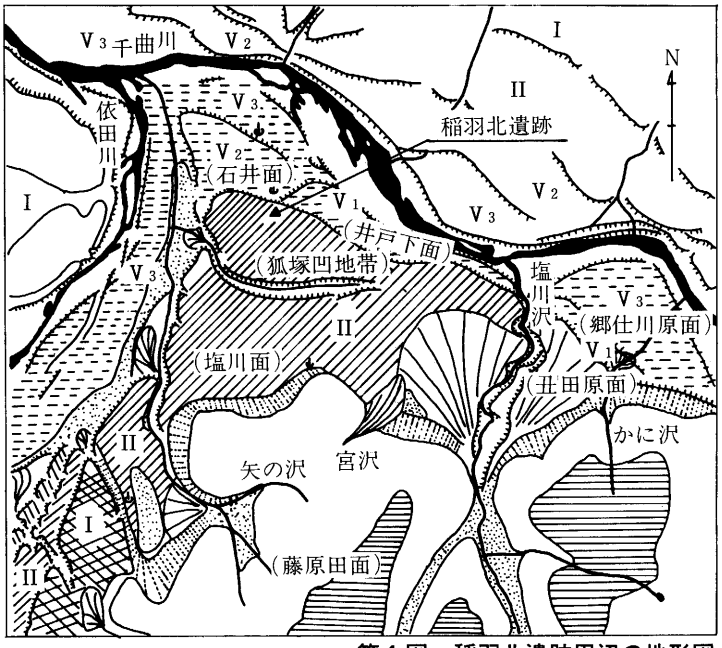
３、井戸下面及び石井面（千曲川の沖積平野部にあたる）。

このうち稲羽北遺跡は塩川面に位置し、その西南部の段丘縁に近い地点に立地している。

この塩川面は、千曲川対岸の太平寺面（第II面）に対比され、南は矢の沢を境に長瀬地区と西は塩川沢を境に丑田原（うしだはら）面とそれぞれ接し、丸子町の中では最も広い平野を形成している。しかし、この平坦面は沢や谷の自然流がほとんどない乏水地帯になっており、長大な灌漑用水路がひかれている。また、地質的には、第４紀上田層に属し、砂質土壌の沖積層が堆積していて、恵まれた耕地を形成している（第２図）。遺跡が立地する塩川面で注意しなければならないのは、狐塚凹地帯と塩川沢の西方に開けた宮沢扇状地である。狐塚凹地帯は塩川面の形成時からあったもので、幅40～50ｍにわたり、東西に走っている。深さは西方の下流部で約５ｍあり、東北の上流部にいくにしたがい浅くなり、塩川扇状地の影響を受けて消滅している。これは旧千曲川の流路であり、塩川面の最低地になっていて、塩川面の排水路の役割をはたしている。なお、この塩川面は、凹地帯を境に南北に分断されるが、いずれも凹地帯に傾斜をみせ、稲羽北遺跡の立地する北側、すなわち段丘崖に近い部分が最高地になっている。

次に、宮沢扇状地は、塩川面の南西、南方集落一帯にあたり、天下山に源を発する宮沢が形成した扇状地である。宮沢は沢も小さく、水も少なく、したがって営力も弱いので大きな扇状地にはならなかったが、塩川沢扇状地とともに塩川面上に形成された扇状地のうちの１つである。

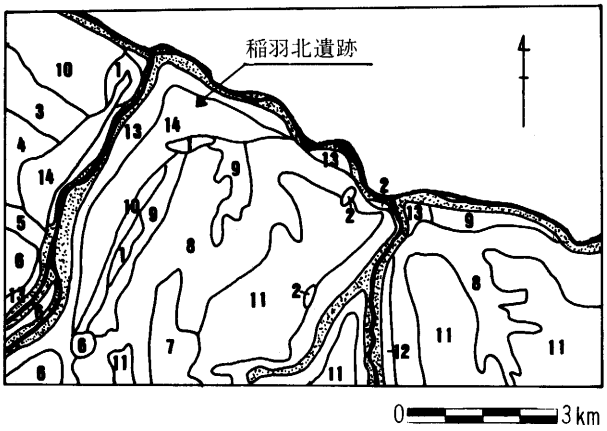
ところで、稲羽北遺跡は、前述のとおり、塩川面の北端にあたる段丘縁に立地しているが、段丘面は極めて水の乏しい地域であるのに対し、段丘崖下には豊富な湧水があり、ことに狐塚から石井にかけては７つ井戸と称される湧水が噴出している。とりわけ、稲羽北遺跡のほぼ直下、すなわち、塩川面から６～７ｍ低い石井面には、湧水の中でも最大の石井清水があり、稲羽北遺跡と全く無関係ではなかったと思われる。また、現在の塩川面は条里遺構が残るなど当地方一番の美田地帯を形成しているが、乏水地帯のため他地区からの水の供給が必要で、その導入なくして条里遺構の開田化は不可能であった。このことは、稲羽北遺跡を考えるうえでも



凡　例

段丘崖
提　防
湧　泉
山　地
台　地
第Ⅰ段丘面
第Ⅱ段丘面
第Ⅲ段丘面
第Ⅴ段丘面
扇状地
崖　錐
低湿地

第1図　稲羽北遺跡周辺の地形図



凡　例

鳥帽子火山群

1 < 小諸溶結凝灰岩
普通輝石紫蘇輝石石英安山岩質

2 < 岩脈類
普通輝石紫蘇輝石安山岩

第三紀・中新世	3	小川層
	4	青木層(上部)
	5	別所層
	6	富士山層
第三紀・鮮新世	7	瓜生坂層
	8	布引層
	9	大杭層
	10	梨平層
第四紀	11	ローム層
	12	沖積層
	13	旧河床礫
	14	上田層

第2図　稲羽北遺跡周辺の地質図

極めて重要な立地条件であるといえる。

第2節　歴史的環境

塩川地区の歴史の始まりは、今のところ縄文時代中期と考えられる。この頃になると、依田窪地域全体に人口増加の現象がみられ、文化の高揚が顕著であった。塩川地区では松葉遺跡、大岩遺跡、東畑遺跡など小規模な遺跡が存在している。しかし、縄文時代中期以降は遺跡数が限定されたものになり、地域的な片寄りをもって分布している。千曲川流域地方では開発が遅れた後進地域といえる。

ところが、6・7世紀の古墳時代後期に至ると、再び高揚期をむかえ、依田川下流域を中心に遺跡数は増加し、急速な勢いで開発が進められたことが認められる。とりわけ、稲羽北遺跡の下段は井戸下面にあたり、一帯が古墳時代後期の集落跡とされる井戸下遺跡が所在している。井戸下面は井戸下、一丁畑、坂下、砂原の各地籍が細長く連続し、塩川沢で終わるが、井戸下遺跡は石井清水付近から現在の坂井集落直下にかけて広がるもので、この一部は昭和41年に発掘調査が実施されている。やはり、稲羽北遺跡の所在する塩川面は、乏水性の自然条件から集落の発達は遅れており、容易に水が得られる井戸下面や塩川沢流域に集落の発達がみられたといえる。

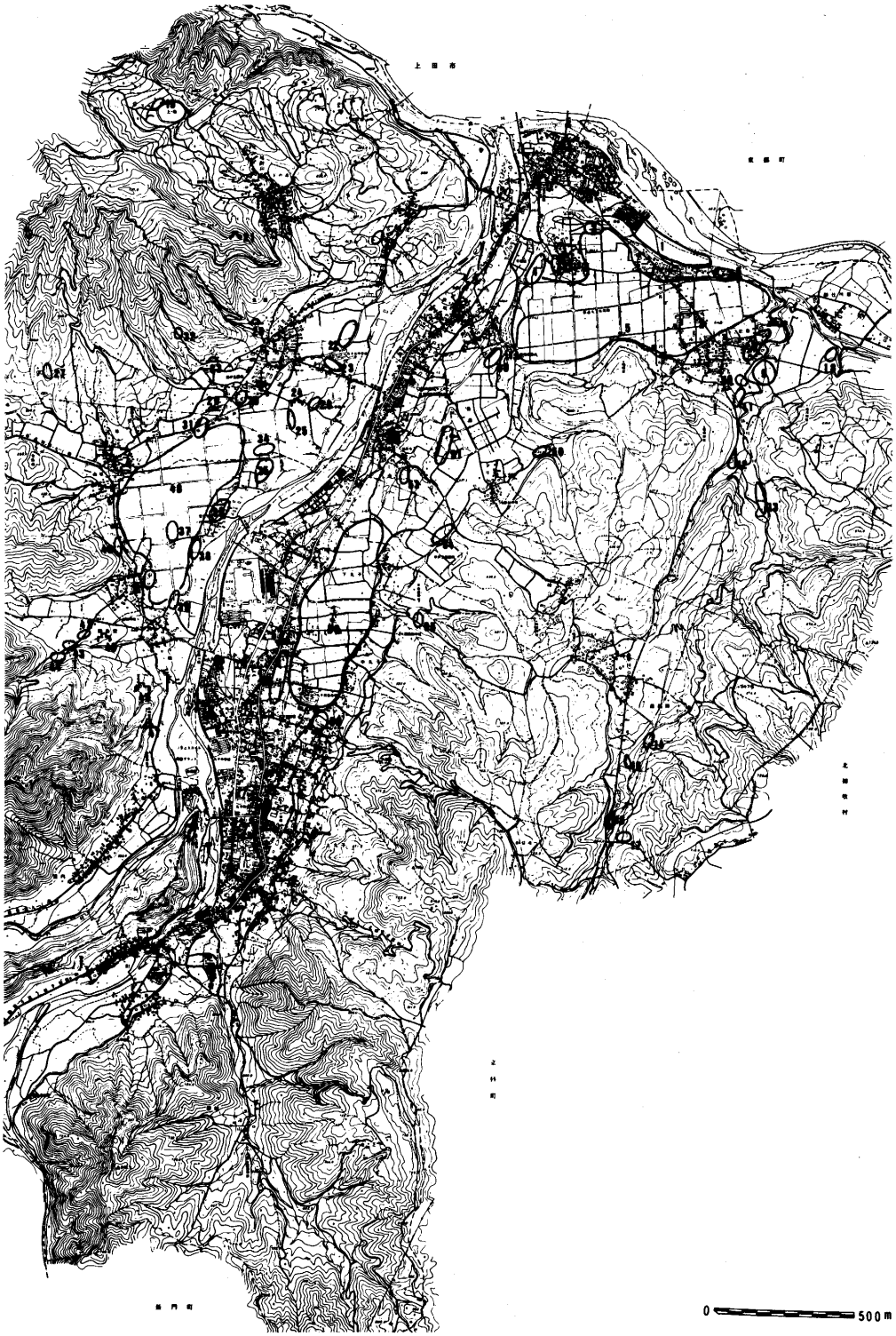
古墳時代後期から活発化した地域の開発は、奈良時代になるとさらに進み、依田川下流域の依田地区はその中心的存在であった。例えば遺跡では、依田条里遺構、古窯跡群、深町・中条南の集落遺跡群、諏訪田の掘立柱建物跡を伴う官衙的遺構などが発掘調査等により明らかにされている。

ところが、依田川対岸の塩川地区においては強度の乏水性のため、大幅な遺跡数の増加や開発は起こらず、この乏水性を生かした「牧」の存在が考えられている。すなわち、鎌倉時代の「吾妻鏡」文治2年（1186年）の条にある「塩川牧」の存在がそれである。この牧は、平安時代初期に著わされた「延喜式」には載っていないところから、一志茂樹氏は、平安時代中期以降から鎌倉時代初期頃までの間につくられたものと推定され、この地に牧があったことがかなり有力視されている。

「平家物語」や「源平盛衰記」には、木曽義仲挙兵の折、白鳥河原に兵を集結した旨の記載がみられる。この白鳥河原とは塩川地区郷仕川原地域に連続する所であり、兵の集結にあたりこの地が選ばれたのは、牛馬の調達が容易な塩川牧があること、天然の牧寄せとしての条件を備える丑田原面があったことなどが大きな要因であったと考えられる。

なお、この塩川地区には、牧を監督した牧司庁や、牛馬の飼糧用の作物を作った牧田の存在も当然あったと考えられるが、今のところ全く不明である。

ところで、塩川牧はおそらく鎌倉時代まで続いたと思われるが、この塩川面に長大な用水堰が引かれると、ここに広大な条里水田地帯が出現するに至った。もちろん、苦労して導入した



第３図　依田川下流域の遺跡分布図

第１表　依田川下流域の遺跡地名表

番号	地区	遺　跡　名	種　別	遺　物　・　遺　構
1	塩川地区	井戸下	集落址	住居址・土壙
2		稲羽北	〃	住居址・土壙・ピット群・土壙墓・土師器・須恵器・灰釉陶器
3		稲羽西	包蔵地	土師器・須恵器
4		市の町	〃	〃　〃
5		塩川条里遺構	水田跡	
6		羽毛田	包蔵地	石鏃・土師器・須恵器
7		藤森塚古墳	古　墳	横穴式石室
8		松葉	包蔵地	縄文中期土器・土師器・須恵器・内耳土器
9		古免	〃	土師器・須恵器
10		東畑	〃	縄文中期土器・土師器・須恵器・石棒
11		道祖神	〃	縄文中期土器・土師器・須恵器
12		大岩	〃	縄文中期土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・石鏃
13		白山沢	〃	縄文中期土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・石鏃
14		二反田	〃	土師器
15		山ノ神	〃	土師器・須恵器
16		宮ノ前	〃	〃
17		山田	〃	〃
18		丑田原	〃	〃
19	依田地区	大久保	〃	土師器（高台皿・糸切皿）
20		明賀	〃	打製石斧
21		尾野山城址	城　跡	
22		深町	集落址	縄文後晩期の遺溝遺物多数，平安時代の住居址５軒、遺物多数
23		土堂	包蔵地	縄文土器・土師器・磨製石斧
24		中城館跡	館　跡	
25		中城南	集落址	土師器・須恵器・灰釉陶器・住居址・土壙墓
26		上川原	包蔵地	縄文土器・弥生土器（箱清水式）
27		田ノ入窯址	窯　址	土師器・須恵器
28		大沢古墳	古　墳	横穴式石室
29		荒谷古墳	〃	
30		鼓井戸	包蔵地	土師器・須恵器
31		四丁町	〃	

番号	地区	遺　跡　名	種　別	遺　物　・　遺　構
32	依田地区	山ノ神窯址	窯　址	土師器・須恵器
33		山ノ神古墳	古　墳	横穴式石室
34		原沢	包蔵地	土師器・須恵器
35		社軍神	集落址	土師器・須恵器・玉作工房址
36		三角	包蔵地	土師器・須恵器・グリーンタフ原石
37		諏訪田	官　衙	土師器・須恵器・布目瓦・円面硯・柱痕・掘立柱建物址・堰跡
38		的場	包蔵地	土師器・須恵器・灯明皿
39		芹田	〃	縄文土器・土師器・須恵器
40		日影	〃	土師器・須恵器
41		井戸田	〃	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石皿
42		高築地	〃	縄文土器（加曽利Ｅ式）
43		恋応	〃	縄文土器・多孔石
44		大洞	〃	土師器
45		依田館跡	館　跡	比定地が２ヶ所有る
46		〃	〃	
47		岩谷堂岩窟古墳	葬所跡	直刀・土師器・須恵器・乳文鏡・紡錘車
48		依田条里遺構	水田跡	
49	長瀬地区	宮原	集落址	土師器・須恵器・住所址
50		勝負沢	包蔵地	土師器
51		上平	〃	土師器・須恵器
52		穴倉古墳	古　墳	横穴式石室
53		八ッ口	包蔵地	土師器（杯完形多数）
54		小練合	〃	土師器・須恵器
55	下・中丸子地区	科平	〃	石鏃・磨製石鏃
56		丸子条里遺構	水田跡	
57		大塚古墳	古　墳	
58		中丸子	包蔵地	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・石斧・石皿・土錘
59		寺屋敷	〃	縄文土器・土師器・須恵器

水を最も有効的に利用するため、碁盤目状に区画した水田、すなわち条里水田になったことはいうまでもない。この条里遺構の成立は、人々の生活に大きな変化を与えることとなった。まず、水田面積の大幅な増加に伴い、塩川地区の人口が増加し、継続的な水の導入により塩川面の乏水性は緩和され、従来集落のなかったところに集落ができ、集落のあったところが水田と化すという事態も生じたと思われる。現在につながる塩川地区の集落形態はまさにこの時期につくられたものと考えてよいと思われる。

また、稲羽北遺跡は、この塩川条里遺構ときわめて密接なつながりを有するものといえる。それは、この遺跡が条里水田の末端にあり、条里水田の成立とともに消滅した集落跡と考えられるからである。

この塩川条里遺構は、昭和51～53年にかけて、まったく新しい見地に立った総合調査が実施されたが（「丸子町地域開発史」昭和57年度丸子町教育委員会刊）、その結果、町内に残存する3ヵ所の条里遺構の中で、依田条里遺構についで古く、その成立時期は中世であろうと推定されるに至った。しかし、この成立は、水系を中心とした比較順位論とでもいうべき方法で推定されたものであり、中世のいつ頃成立したかという詳細な検討は、以後の考古学的調査に委ねられていたといってもよいであろう。その意味で、今回の調査は、塩川条里遺構成立の鍵を握る極めて重要なものであろうと考えられる。

第3節　遺跡の状態

稲羽北遺跡の調査区域は、水田の区画に沿って中央より西側の地域を第Ⅰ区とし、中央より東側の地域では北側の河岸段丘縁から南側にかけて第Ⅱ区、第Ⅲ区、第Ⅳ区に分けた。以下、第Ⅰ区から順に遺跡の状態について触れておきたい。

第Ⅰ区における土層の状態は、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層に分けられる。

Ⅰ層は耕作土で、10～15cmほど堆積している。色は白味がかった茶色を呈し、粘り気があり、硬くしまっている。礫は含まず、遺物も包含しない。

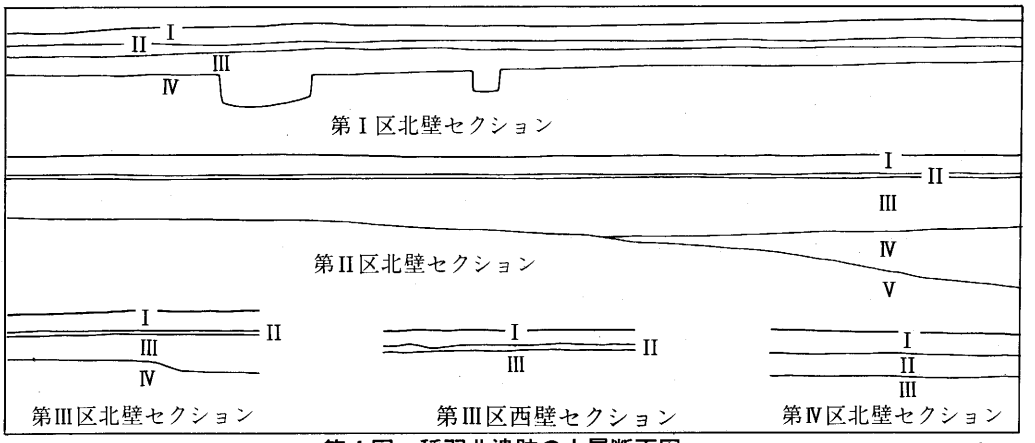
Ⅱ層は溶脱層で、5～7cmほど堆積している。色は赤褐色を呈し、粘り気があり、礫を含む。遺物は、土師器や須恵器の小片が少量出土している。

Ⅲ層は、遺物包含層にあたり、出土遺物が多い。色は黒褐色を呈し、粘り気があり、礫を含む。遺物は、土師器や須恵器の小片が主であり、器形がわかるものはごくわずかである。特に、Ⅰ区の中央よりやや西側の地点に遺物が集中していた。

Ⅳ層は、地山と思われ、色は茶褐色を呈し、礫を含む。土質は砂質で硬い。この層を切って多くのピットや土壙、及び住居址が1軒検出されている。

第Ⅱ区の層序は、Ⅰ層、Ⅱ層、Ⅲ層、Ⅳ層、Ⅴ層に分けられる。

Ⅰ層は耕作土で、15cmほど堆積している。灰茶褐色を呈し、粘り気がある。礫は含まず、遺物も包含しない。



第４図　稲羽北遺跡の土層断面図　0 2m

（Ⅰ　灰茶褐色土層　（II　赤褐色土層　（III　黒褐色土層　（Ⅳ　黄褐色土層　ただし、第II区Ⅳ層は黒褐色土層、Ⅴ層は黄褐色土層である。

II層は溶脱層で、３cmほど堆積している。赤褐色を呈し、砂礫を含み、粘り気が少ない。遺物は包含しない。

III層は黒褐色を呈し、20～50cmほど堆積している。小礫を多く含み、粘り気が少ない。遺物包含層と思われ、土師器や須恵器の破片が多く出土している。

Ⅳ層はIII層と同じく黒褐色を呈するが、Ⅰ層に似て粘り気が強く、礫を含まない。この層は、全面に堆積しているわけではなく、Ⅴ層がゆるやかに落ち込んでいる部分のみに限られ、最厚部で50cmほど堆積している。

Ⅴ層は黄褐色を呈し、粘り気が強く、硬くしまっている。砂礫はあまり含まない。この層は地山と思われ、多くの遺物とともに、ピットや土壙及び住居址３軒や鍛冶跡等が検出されている。

第III区の層序は、Ⅰ層、II層、III層、Ⅳ層に分けられる。

Ⅰ層は耕作土で、10～15cmほど堆積している。黒褐色を呈し、粘り気があり、礫を含む。

II層は溶脱層で、３～５cmほど堆積している。礫を少量含み、粘り気がある。

III層は茶褐色を呈し、20～30cmほど堆積している。遺物を含む。この層は、部分的に堆積しており、II層の次にⅣ層が堆積している地点もある。

Ⅳ層は黄褐色を呈し、多くの礫と砂が少量混在しており、粘り気がある。この層は、地山と思われ、土鈴をはじめとして、土器片等の遺物が出土している。ここでは、土壙墓と思われる遺構が検出されている。

第Ⅳ区の層序は、Ⅰ層、II層、III層に分けられる。

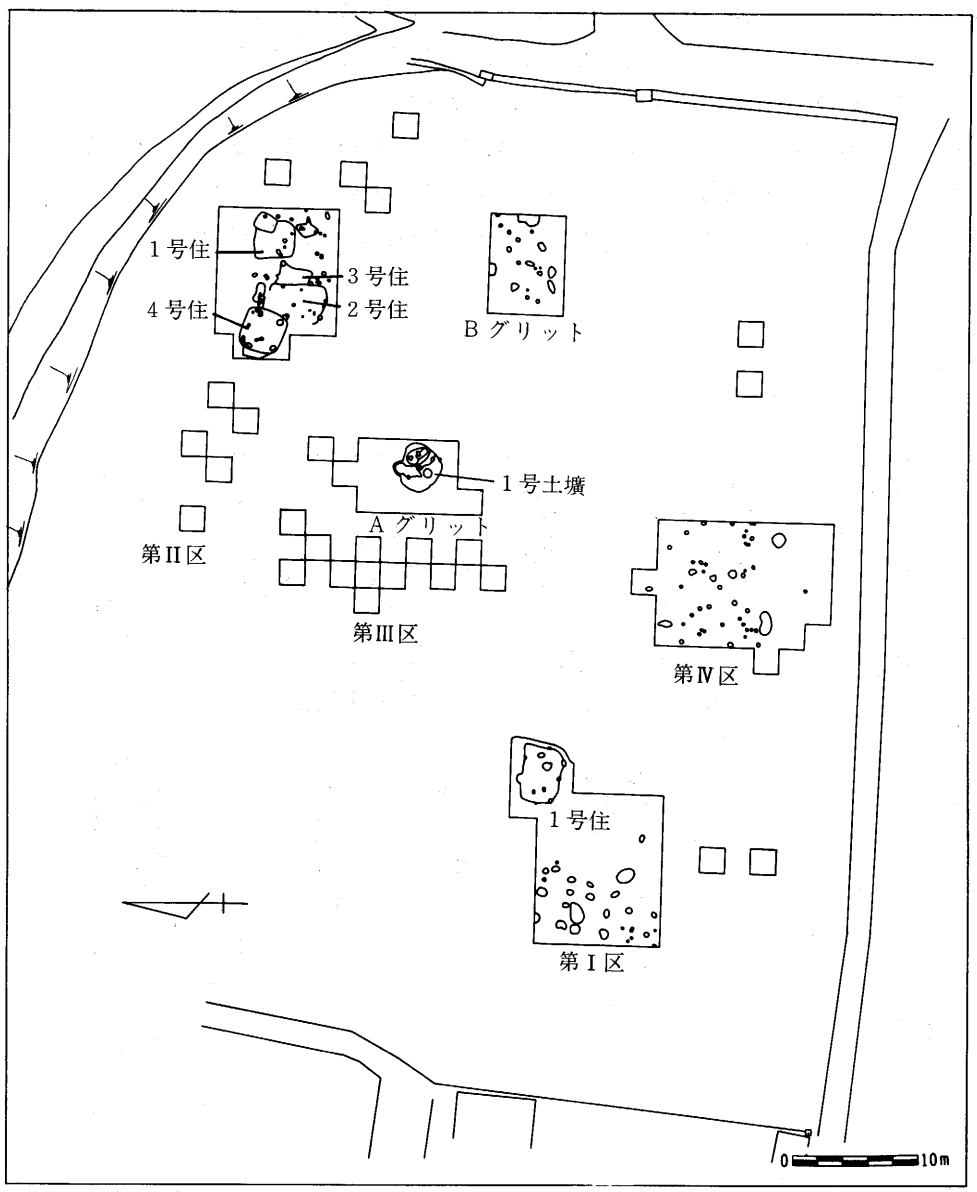
Ⅰ層は耕作土で、15cmほど堆積している。白味がかった茶色を呈し、礫を含み、粘り気がある。

II層は茶褐色を呈し、20cmほど堆積している。礫を含み、粘り気がある。遺物は包含しない。

III層は黄褐色を呈し、多量の砂礫を含み、硬い。この層は地山と思われ、この層を切って多くのピットや土壙が検出された。

第３章　遺　　構

この調査で検出された遺構は、ピット群３、土壙10基、土壙墓２基、奈良時代～平安時代の住居址５軒（１軒は鍛冶跡か）である。以下、各調査区ごとに遺構について触れてみたい(第５図)。



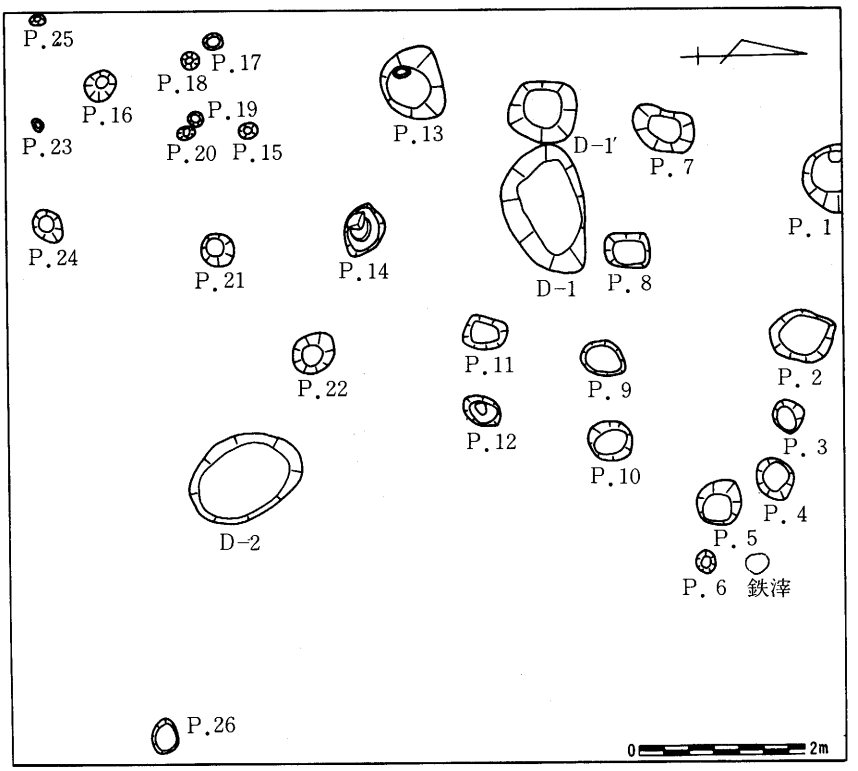
第５図　稲羽北遺跡遺構全体図

第1節　第Ⅰ区

第Ⅰ区は、東西12m×南北10mのグリットを設定し、その東北隅に東西6m×南北5mのグリットを設定し、また、南側に2m×2mのグリット2つを拡張した。ここではピット群1、土壙3、住居址1が検出された（第6図）。

ピット群

第Ⅰ区中央部より西側に26個のピットが検出され、調査区域外にもひろがりをみせている。各々のピットの形状は、円形を主体とし、方形、楕円形等がある。円形ピットの大きなものは径80cm、深さ19cmを測り、小さいものは径18cm、深さ2.5cmを測り、不定形である。また、規則的な配列も認められない。ピット群はすべて第Ⅳ層で確認され、覆土は粘り気のある第Ⅲ層の黒褐色土である。この状態からみて、ピットはすべて同一時期に作られたものと思われる。また、1号ピットから鉄釘が、12号、14号ピットから石が、16号ピット付近から鉄滓が出土している（第6図）。



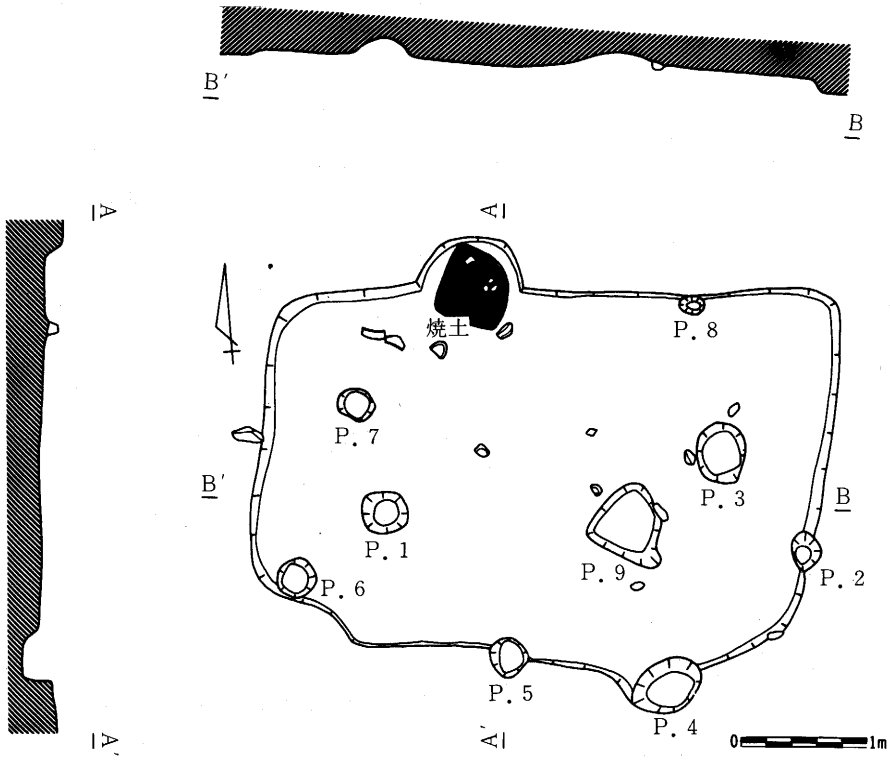
第6図　第Ⅰ区ピット及び土壙実測図

第2表　ピット群計測値一覧表

No.	形　状	長　軸	短　軸	深　さ	No.	形　状	長　軸	短　軸	深　さ
I区		cm	cm	cm	4	円　形	20 cm	18 cm	16.0 cm
1	円　形	80	?	18.5	5	〃	16	15	25.5
2	楕円形	80	62	18.5	6	楕円形	60	34	45.5
3	円　形	40	36	20.0	7	円　形	22	22	37.0
4	〃	48	46	34.0	8	〃	22	19	29.0
5	〃	60	52	18.0	9	〃	32	30	32.0
6	〃	26	22	7.0	10	〃	19	18	15.0
7	楕円形	80	50	28.0	11	楕円形	27	16	15.0
8	〃	52	40	17.5	12	円　形	36	33	23.0
9	〃	56	40	20.0	13	〃	23	20	10.5
10	円　形	54	50	27.0	14	〃	30	24	15.5
11	楕円形	54	40	13.0	15	〃	20	18	15.5
12	〃	50	32	17.0	16	〃	21	18	15.5
13	〃	90	72	38.0	17	円　形	30	27	28.0
14	〃	66	46	27.0	18	〃	43	42	37.0
15	円　形	24	18	18.5	III区				
16	〃	40	36	13.5	1	円　形	40	40	16.5
17	〃	24	17	8.0	2	楕円形	36	30	12.5
18	〃	22	22	11.0	3	〃	26	22	6.0
19	〃	18	18	2.5	4	長方形	36	32	9.0
20	〃	22	16	13.0	5	台　形	62	60	17.0
21	〃	40	40	27.0	6	円　形	30	27	16.0
22	楕円形	54	46	31.0	7	長方形	30	26	14.5
23	〃	20	10	22.0	8	円　形	30	28	10.0
24	〃	42	33	26.0	9	〃	24	24	7.0
25	〃	18	14	12.0	10	楕円形	70	34	19.0
26	〃	42	33	14.5	11	円　形	26	22	10.0
II区					12	〃	38	30	19.0
1	楕円形	40	25	21.0	13	三角形	38	30	10.5
2	〃	35	23	31.5	14	円　形	14	14	16.5
3	円　形	28	25	38.0	15	〃	24	24	5.5

No.	形　状	長　軸	短　軸	深　さ
Ⅲ区	cm	cm	cm	cm
16	長方形	72	46	14.0
17	楕円形	110	40	10.5
18	〃	74	60	7.0
Ⅳ区				
1	円　形	35	32	23.5
2	〃	22	22	14.0
3	楕円形	34	26	9.0
4	〃	18	15	18.0
5	八ノ字	40	12	4.0
6	円　形	16	16	13.0
7	〃	20	20	10.5
8	楕円形	30	26	9.5
9	八ノ字	48	18	11.0
10	円　形	22	20	9.0
11	楕円形	60	52	5.0
12	〃	32	26	20.0
13	円　形	34	32	23.0
14	〃	30	28	10.0
15	〃	50	44	14.0
16	〃	30	28	10.0
17	〃	62	62	20.5
18	〃	20	20	7.0
19	楕円形	30	24	11.0
20	円　形	30	26	11.0
21	楕円形	50	34	13.0
22	円　形	26	24	7.0
23	〃	30	30	17.0
24	〃	30	30	10.0
25	〃	30	26	20.0
26	楕円形	34	30	24.0
27	〃	34	27	17.0

No.	形　状	長　軸	短　軸	深　さ
28	楕円形 cm	24 cm	18 cm	4.0 cm
29	〃	26	18	12.0
30	円　形	26	26	19.0
31	〃	16	14	15.0
32	楕円形	38	28	12.5
33	円　形	28	24	11.0
34	〃	24	24	17.0
35	〃	40	36	14.0
36	〃	30	26	10.0
37	楕円形	28	23	13.0
38	円　形	35	23	17.0
39	楕円形	24	20	5.0
40	円　形	18	18	10.5
41	〃	32	30	13.0
42	楕円形	112	54	14.0
43	〃	18	14	23.6



第７図　第Ⅰ区１号住居址実測図

土壙

土壙は、１号土壙が２基、２号土壙が１基の計３基検出されている。１号土壙は、第Ⅰ区の西壁ぎわにあり、平面が円形のものと楕円形のものからなっている。円形のものは径55cm、深さ28cmを測り、楕円形のものは長軸１ｍ、短軸65cm、深さ20cmを測る。この２つの土壙は２cmの間隔で並んでおり、両方とも確認面はⅣ層で、粘り気のある黒褐色土層を覆土としている。

２号土壙は、第Ⅰ区の中央よりやや南にあり、平面は楕円形で、長軸1.4ｍ、短軸１ｍ、深さ14cmを測る。確認面はⅣ層で、やはり粘り気のある黒褐色土層を覆土としている（第６図）。

１号住居址

１号住居址は、第Ⅰ区の東北隅で検出された。南北3.3ｍ、東西4.5ｍの隅丸長方形のプランを呈し、壁高は６～10cm程で比較的浅い。主軸はほぼ真北方向を示しており、北壁のやや西よりにかまどを持つ。かまどは、長さは南北に45cm、幅は東西に85cmを測り、壁外に張り出して造られている。焚口部は住居址の内部にあり、焼土が焚口部を中心に10cm程の厚さで堆積している。焚口の付近にかまどの構造物の一つと思われる石が２つ置かれている。主柱穴は４本で、他に柱穴と思われるものが５個検出されている。この住居址は、出土した遺物から奈良時代～平安時代の住居址と思われる（第７図）。

第２節　第II区

第II区は、調査区の最北端で、河岸段丘の端に位置している。南北10ｍ×東西10ｍの大グリットを設定し、さらに２ｍ×２ｍの小グリットを９つ設定した。また、住居址確認のため大グリット西壁やや北よりを南北4.5ｍ×東西２ｍ拡張した。第II区で検出された遺構は、ピット群1、土壙３、住居址４（１軒は鍛冶場跡か？）である（第８図）。

ピット群

第II区では16個のピットが検出され、主に南側に集中していた。形状は、円形を主体に楕円形等があり、円形の大きいものは、径37cm、深さ23cmを測り、小さいものは、径20cm、深さ29cmを測る。検出面は、第Ｖ層で、粘り気の少ない黒褐色土層を覆土としている。中には、互いに切り合うものもあるため、すべてが同一時期に掘られたわけではないと思われる。さらに12号ピットからはカワラケの小型坏が、17号ピットからは銅銭（開元通宝他11枚）が出土している（第８図）。

土壙

II区では、３基の土壙が検出されている。

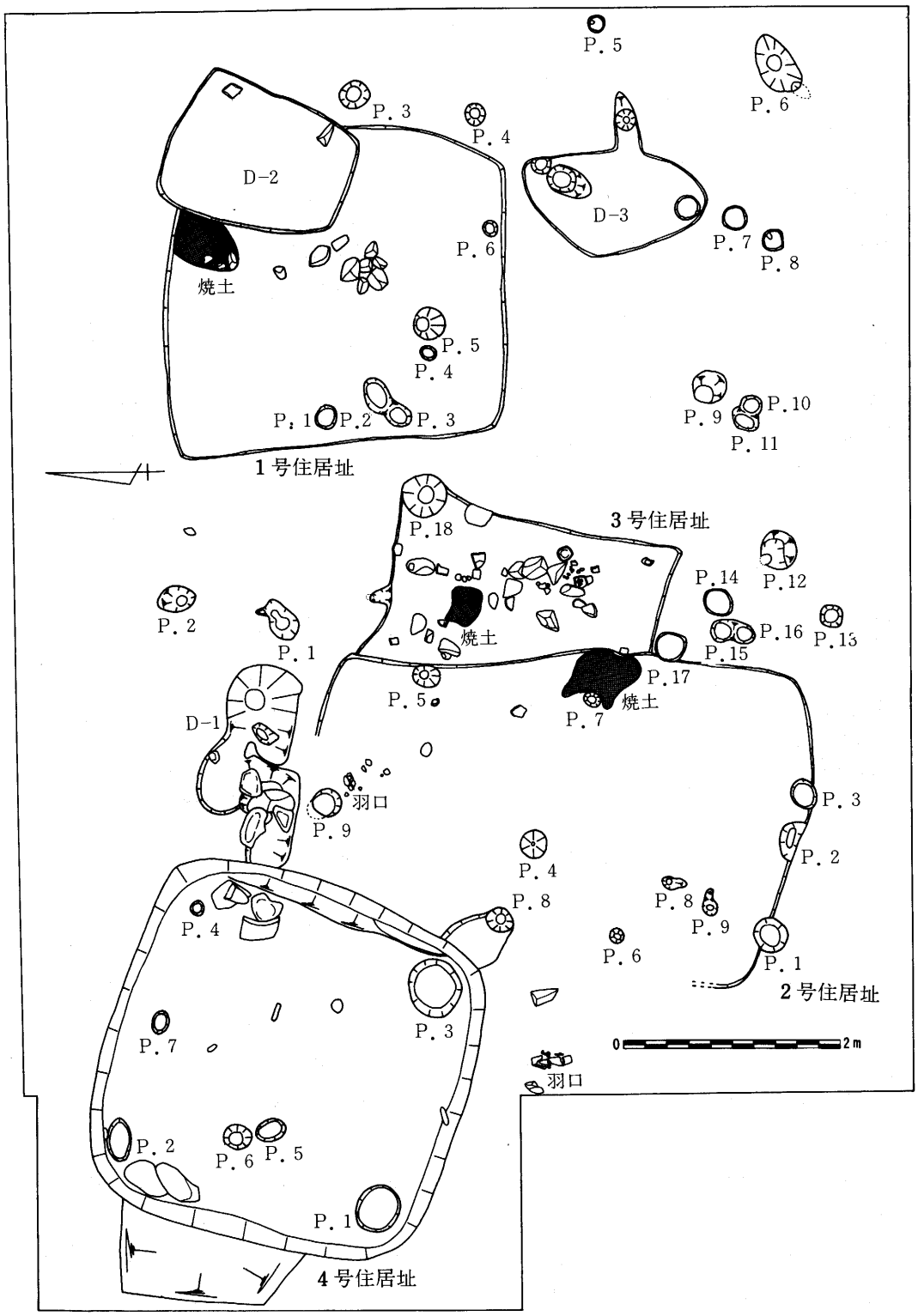
１号土壙　　この土壙は、４号住居址の東側に位置し、鍛冶施設と思われる遺構と接している。長軸1.5ｍ、短軸65cm、深さ18cmを測り、不定形な八ノ字形を呈する。また、土壙の中に長軸23cm、短軸14cm、深さ10cmを測る長方形のピットが検出された。確認面は第Ｖ層で、粘り気のない黒褐色土層を覆土としており、覆土中に炭化物が集中して検出された。

２号土壙　　この土壙は１号住居址を切って掘り込まれている。長軸1.7ｍ、短軸1.3ｍ、深さ15cmを測り、不定形な長方形を呈している。また、土壙の内部に石が２つと、焼石が１つ出土している。底面は、ほぼ平坦だが、壁ぎわに段がついている。確認面は第Ｖ層で、粘り気のない黒褐色土層を覆土としている。

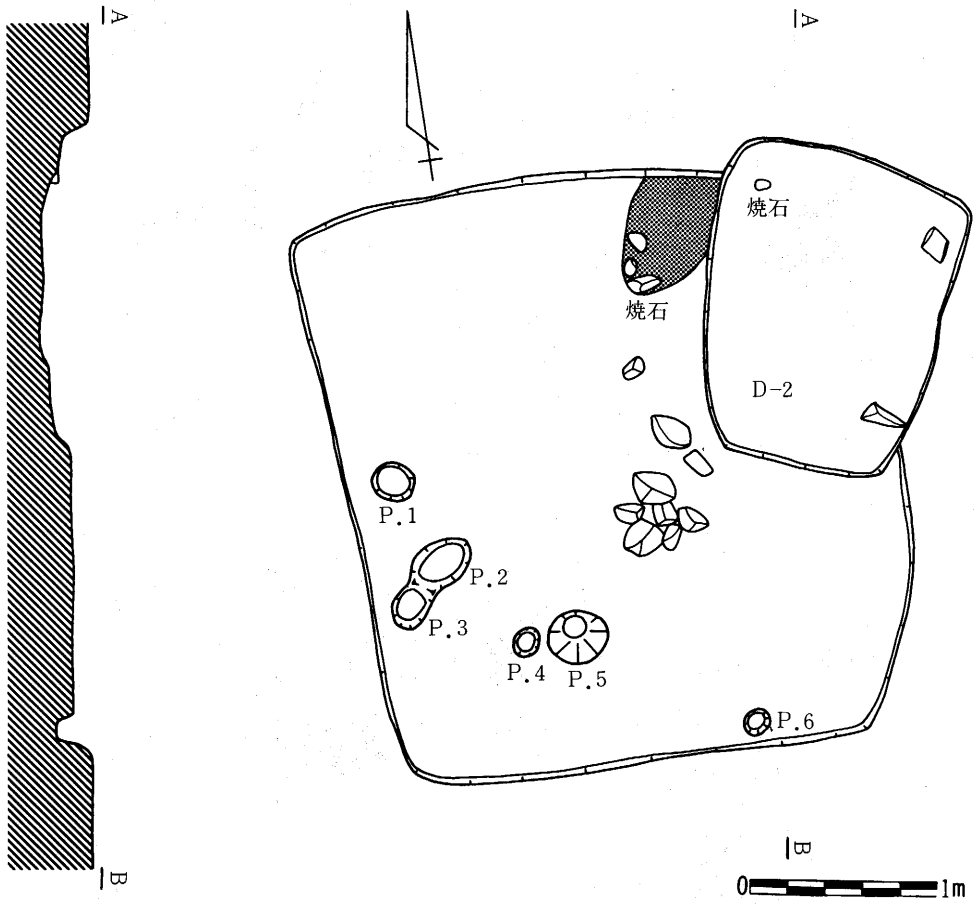
３号土壙　　１号住居址の南側に位置し、きのこ形を呈している。長軸1.7ｍ、短軸1.6ｍ、深さ７cmを測り、底面はほぼ平坦であり、内部にピットを４つ持つ。ピットは最大のものが長径43cm、短軸25cm、深さ38cmを測り、小さいものが長軸18cm、短軸15cm、深さ９cmを測る。確認面は第Ｖ層で、粘り気のない黒褐色土層を覆土としている（第８図）。

住居址

第１号住居址　　この住居址は第II区の東側に位置し、東北隅を２号土壙によって切られている。南北3.1ｍ、東西2.9ｍを測り、隅丸方形のプランを呈し、壁高は４cmで非常に浅い。主軸はほぼ真北方向を示している。北壁のやや東よりに焼土が検出され、焼石も２個出土しているが、かまどは検出されていない。焼土は、２号土壙によって切られており、炭化物が検出されている。ピットは６個検出されているが、柱穴と思われるものは１個だけである。また、住居址の中央やや南よりに石が８個かたまって出土している。出土した土器からこの住居址は奈



第8図　第II区遺構実測図

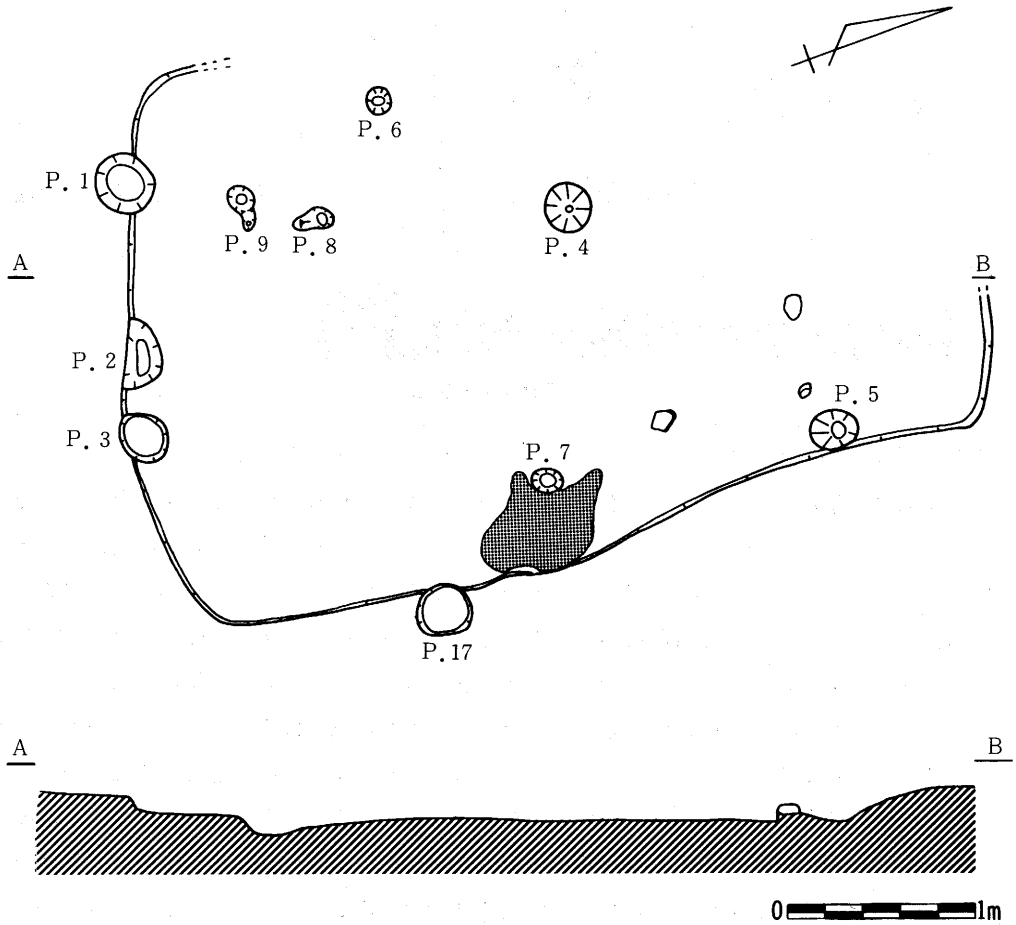


第9図　第II区1号住居址実測図

良～平安時代のものと思われる（第9図）。

2号住居址　　この住居址は、第II区の南西隅に位置し、南壁と東壁、北壁の一部が確認されているのみで全容は不明である。特に北西のコーナーは、第4号住居址によって切られているものと思われる。長軸約4.5m、短軸約3mを測り、隅丸長方形のプランを呈しているようである。長軸は、北東―南西方向を示している。壁高は3cm程で非常に浅い。東壁の中央やや南よりに焼土が検出されたが、かまどは確認されていない。柱穴と思われる穴は3個検出されているが、主柱穴は不明である。出土した土器からこの住居址は平安時代のものと思われる（第10図）。

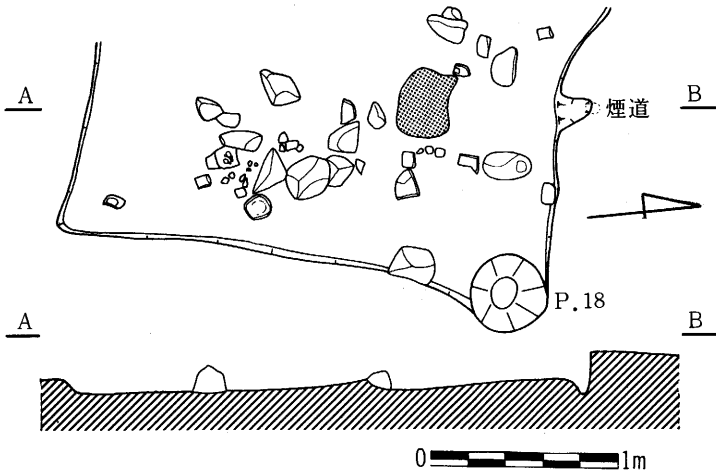
3号住居址　　この住居址は、第II区の中央部に位置する。東壁と北壁、南壁の一部が残っているだけで、西側の半分以上を2号住居址によって切られている。南北2.7mを測り、壁高は5cmで非常に浅い。主軸は、北東―南西方向を示している。北壁にかまどを持つ。かまどは、



第10図　第II区２号住居址実測図

長さは南北に55cm、幅は東西に70cmを測り、長さ（南北）20cm、幅（東西）20cmの煙道を備えている。かまどの構造は石組みで、両側の石は焼けており、焚口部の手前に焼土が堆積している。また、東壁の中央部付近に石が７個かたまって出土しており、その周辺から土器片が多く出土している。柱穴と思われるものは検出されていない。出土した遺物からこの住居址は、奈良時代の住居址と思われる（第11図）。

４号住居址　　この住居址は、第II区の西際に検出された。住居址の覆土や床面から土器に混じって、炭化物や鉄滓が多く出土しており、鍛冶用の施設としての性格が強いものである。北東・南西3.4m、北西・南東3.5mを測り、隅丸方形のプランを呈している。主軸は、北東・南西方向を示している。壁高は40cmで他の住居址と比較して非常に深い。また、床面はほぼ平坦で、硬くしまっており、壁もしっかりしている。西壁は、中央部を中心に幅1.7mにわたり、深さ20cmほどロート状に掘り込まれており、この住居址の入口と思われる。また、南隅付近に

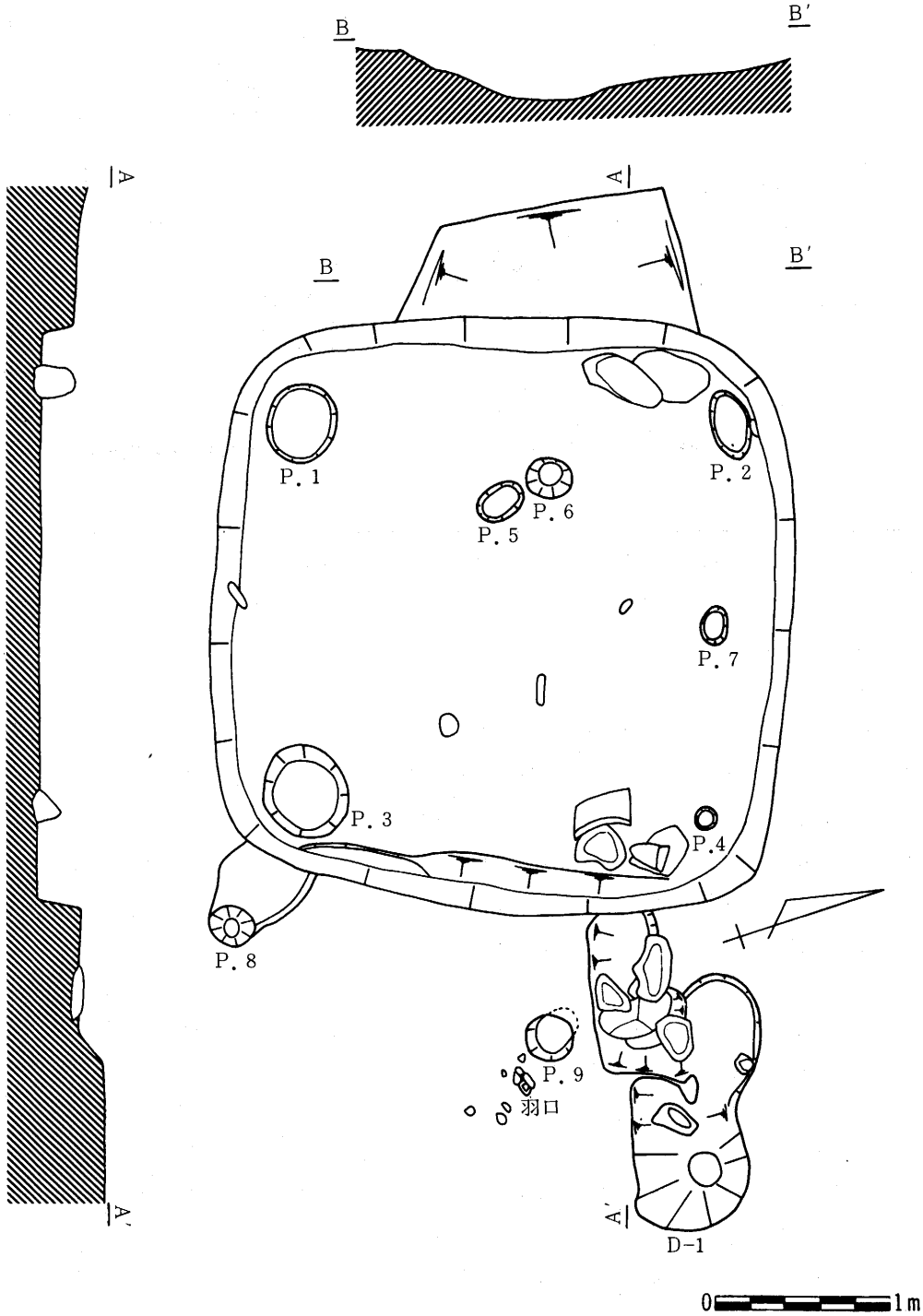


第11図　第II区３号住居址実測図

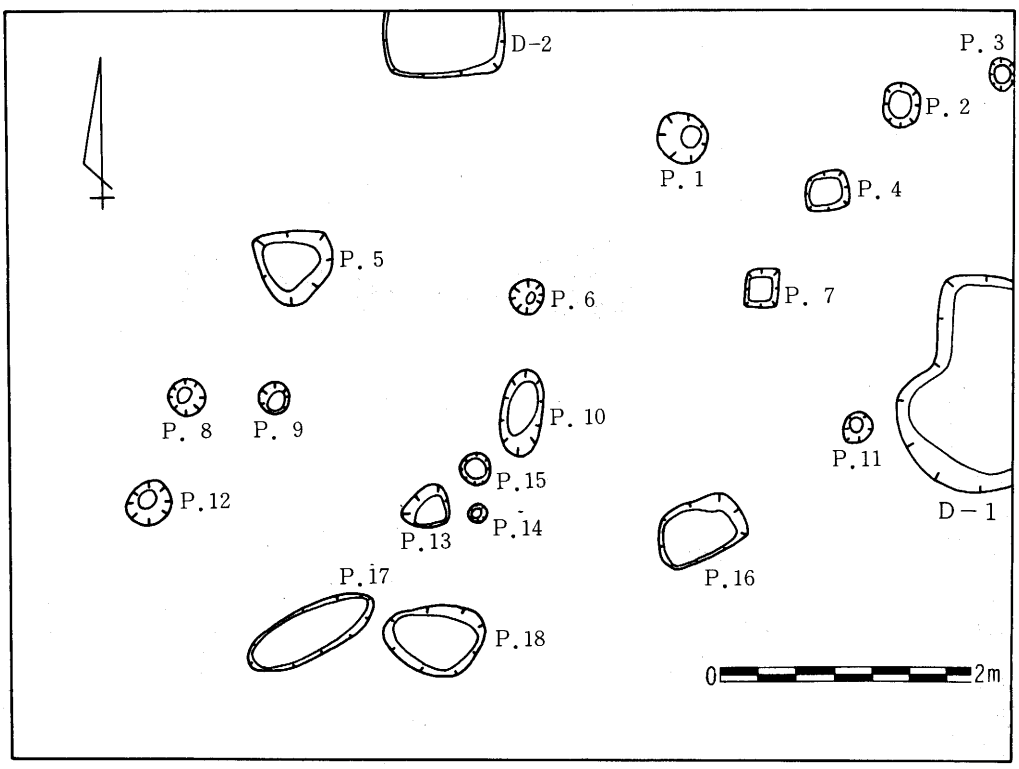
径50cm、深さ20cmの炭化物が多量に詰まった円形のピットが検出された。炭化物は原形をよく保っており、鍛冶専用に使われたものではないかと考えられる。さらに、炭化物の入ったピットのすぐそばから東壁に沿って長さ2.1ｍ、幅17cm、深さ５cmの溝が検出され、溝がつきる北隅付近に河原石が４個配置されている。そのうち１個は焼石で、それに対応する形で東壁の外側に鍛冶用施設と思われる石が検出された。それは、長さ95cm、幅45cmに浅く掘りくぼめられ、中心が焼けて３つに割れた楕円形の石で、それを囲むように他の石が３個出土している。楕円形の石は、長軸45cm、短軸20cm、厚さ15cmを測る。中心に焼成によってできたと思われる輪がしるされ、鉄滓がこびりついて、その石の下からは、鉄滓が少量出土した。また、石の周囲には焼土が厚く堆積しており、長期間使われていたと思われる。さらに、この施設から50cm程離れた所から羽口の破片が出土している。また、南隅付近に東壁に接して長さ40cm、幅50cm、深さ３cmの底面の平坦な溝が検出され、その先に径22cm、深さ12cmのピットが掘られていた。煙出しとして使われたのであろうか。そして、このピットから西へ1.5ｍ程離れた西壁のそばから羽口が廃棄されたような形で出土している。主柱穴と思われるものは２つあり、いずれも西側に検出されている。住居址内の東側にはこれと対応する穴が検出されておらず、東側は住居址の外に柱を建てたのか、あるいは住居址内に石を置いてその上に柱を建てたのか、いずれかと思われる。かまどは検出されておらず、人の住んだ様子もないことから、これは鍛冶専用に使用された施設と思われる。また、西側の北隅の入口付近に踏み石に使ったと思われる河原石が２個置かれていた。この住居址は、出土遺物から奈良時代～平安時代のものと思われる（第12図）。

第３節　第III区

第III区は調査区の中央に位置している。Ａ、Ｂの２つの大グリットと２ｍ×２ｍの12個の小グリットを設定した。Ａグリットは、南北10ｍ×東西６ｍのグリットであり、北壁の中央と南壁の南西隅に２ｍ×２ｍの小グリットを拡張した。Ｂグリットは、第III区の中央やや東側に位



第12図　第II区4号住居址実測図



第13図　第Ⅲ区Ｂグリットピット及び土壙実測図

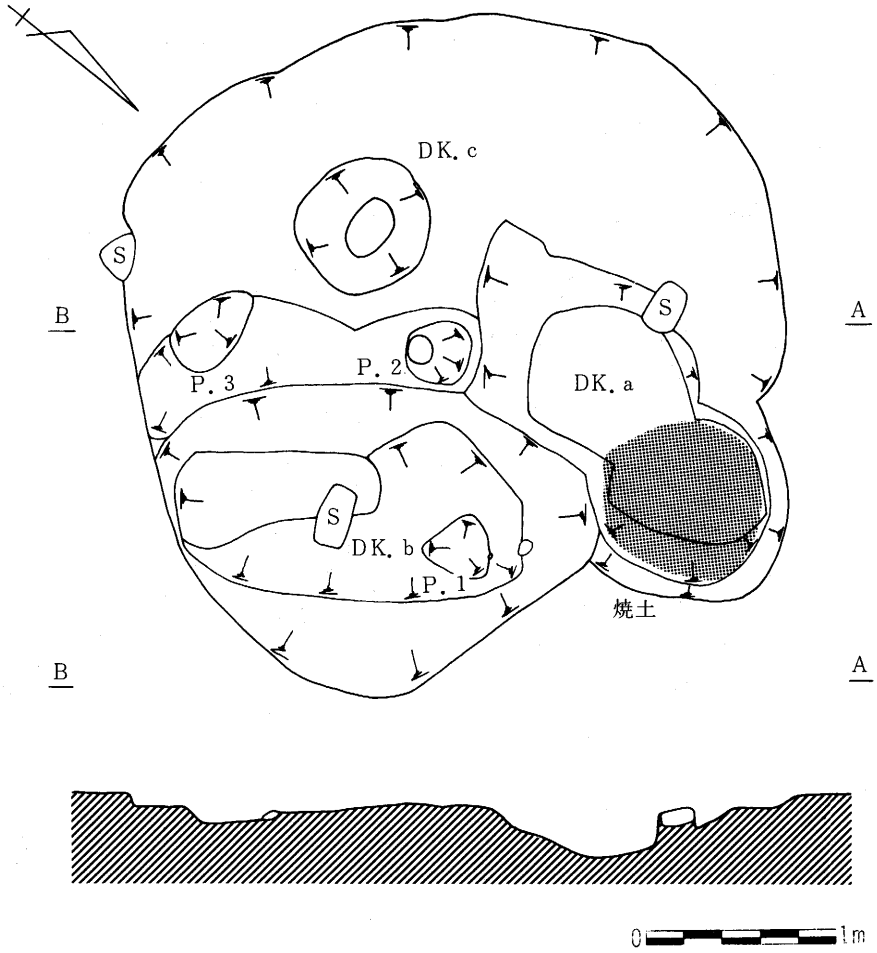
置し、南北６ｍ×東西８ｍのグリットである。第Ⅲ区では、ピット群１、土壙３基、土壙墓２基が検出されている。

ピット群

Ｂグリットの北東隅から南西隅にかけて18個のピットが検出された。ピット群はさらに調査区域外に広がっていると思われる。形状は、円形を主体に方形、楕円形、三角形などがあり、楕円形の大きいものは、長軸1.1ｍ、短軸40cm、深さ10cmを測り、円形の小さいものは径14cm、深さ6.5cmを測る。ピット群はすべて第Ⅲ層で確認されており、粘り気のある赤褐色土層を覆土としている。覆土の状態や切り合いがないことから、ピットはすべて同一時期に掘られたものと思われる。また、ピットは規則的に配列していない（第13図）。

土壙

Ａグリット１号土壙　　東西3.8ｍ、南北４ｍ、深さ６cmを測り、壁は緩やかに立ち上がる。確認面は第Ⅲ層で、粘り気のない黒褐色土層を覆土としている。この土壙の中には、さらに３基の土壙が掘り込まれている。北側よりａ、ｂ、ｃ土壙とする。ａ土壙は北側に位置し、外側へ半円状に張り出している。形状は、ひょうたん形を呈し、二つの土壙が連結している。長軸2.2ｍ、短軸95cm、深さ20cmを測る。北側の土壙には焼土が堆積している。出土遺物から奈良時代末～平安時代頃の所産と思われ、この時代の土壙墓として使われたのであろうか。覆土は、粘り気のない黒褐色土層である。ｂ土壙は、東側に位置し、楕円形を呈している。長軸1.9ｍ、短軸95cm、深さ10cmを測る。やはり粘り気のない黒褐色土層を覆土としている。また、この土壙の中に長軸45cm、短軸43cm、深さ4.5cmの三角形を呈するピットが掘り込まれている。ｂ土壙

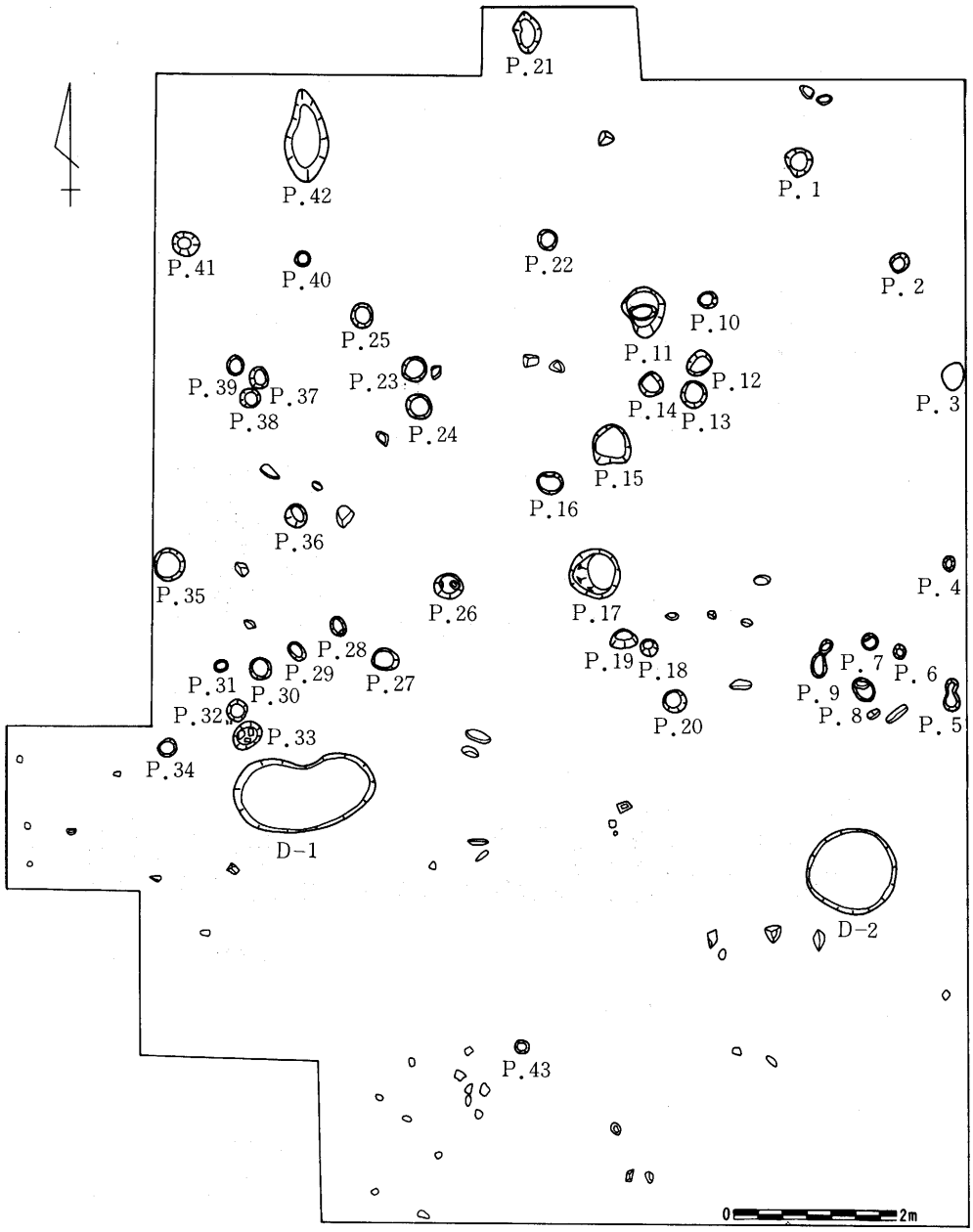


第14図　第Ⅲ区Ａグリット土壙実測図

もａ土壙と同じように土壙墓として用いられたのであろうか。ｃ土壙は楕円形を呈しており、長軸75cm、短軸70cm、深さ16cmを測る。この土壙も粘り気のない黒褐色土層を覆土としている。また、この土壙から、楕円形をした土鈴が１点出土している。また、１号土壙からは、円面硯の脚部の破片が１点出土している（第14図）。

Ｂグリット１号土壙　　Ｂグリット東壁の中央部に位置し、東側は調査区域外にのびている。南北1.7ｍ、東西90cm、深さ８cmを測り、きのこ形を呈する。検出面は第Ⅲ層で、粘り気のある赤褐色土層を覆土としている（第13図）。

Ｂグリット２号土壙　　Ｂグリット北壁の中央部に位置し、北側は調査区域外にのびている。南北52cm、東西96cm、深さ４cmを測り、長方形を呈する。検出面は１号土壙と同じく第Ⅲ層で、やはり粘り気のある赤褐色土層を覆土としている（第13図）。



第15図　第Ⅳ区ピット及び土壙実測図

第４節　第Ⅳ区

第Ⅳ区は、調査区域の南端に位置し、南側は農道に接している。南北14ｍ、東西10ｍの長方形のグリットを設定し、北側の中央と、西側の南よりに２ｍ×２ｍのグリットを拡張した。また、土層確認のため東側に２ｍ×２ｍのグリットを２つ設定した。第Ⅳ区で検出された遺構は、ピット群１と土壙２基である（第15図）。

ピット群

第Ⅳ区では、43個のピットが検出された。形状は、円形を主体に楕円形等があり、円形の大きいものは径62cm、深さ17.5cmを測り、小さいものは径８cm、深さ13cmを測る。ピット群は調査区域外へも続いており、主に第Ⅳ区の中央部より北側の地域に多く集中している。ピットは全て第Ⅱ層で確認されており、粘り気のある黒褐色土層を覆土としている。覆土及び切り合いの少ないところから、大部分は同時期に掘られたものと思われる（第15図）。

土壙

１号土壙　この土壙は、第Ⅳ区の南西に位置し、不定形な楕円形を呈している。長軸1.7ｍ、短軸80cm、深さ17cmを測る。確認面は第Ⅲ層で、粘り気のある黒褐色土層を覆土としている。底面は、ほぼ平坦である（第15図）。

２号土壙　　この土壙は、第Ⅳ区の南東に位置している。径1.1ｍ、深さ７cmを測り、円形を呈する。やはり第Ⅲ層で確認され、粘り気のある黒褐色土層を覆土としている。底面はほぼ平坦である（第15図）。

第４章　遺　物（第16図～第22図、第３表～第５表）

本遺跡の遺物は、住居址、土壙等の遺構に伴い出土し、奈良時代～平安時代の遺物が主体を占めている。その他に、耕作土中より出土した同時期の遺物や縄文時代～弥生時代の遺物、中世の遺物等が出土している。これらの遺物を住居址と土壙ごとに、またその他遺物は一括して述べていきたい。

第１区１号住居址

本住居址から出土した遺物は、土師器の小形甕１点（第４図４）、坏蓋１点（第１図13）、須恵器の高台坏１点（第１図７）、大甕の同一個体数片（第３図８）である。これらの遺物は奈良時代～平安時代に位置づけられる。

第II区１号住居址

本住居址から出土した遺物は少なく、土器片に図示できるものはなかった。その中で砥石が１点（第７図９）出土している。

第II区２号住居址

本住居址より出土した遺物は少なく、須恵器の短頸壺の肩部一点（第２図９）を図示するにとどまった。表面には釉薬がかかっており、裏面には青海波文が残されている。

第II区３号住居址

本住居址から出土した遺物は、土師器長胴甕２点（第４図３、７）と底部に木葉圧痕を残す甕１点（第４図８）が出土している。坏等の器種は小破片が出土しているが図示しえなかった。第４図３の長胴甕は床面直上から出土した10数点の破片による復元実測図である。これらの遺物は、奈良時代に比定される。

第II区４号住居址

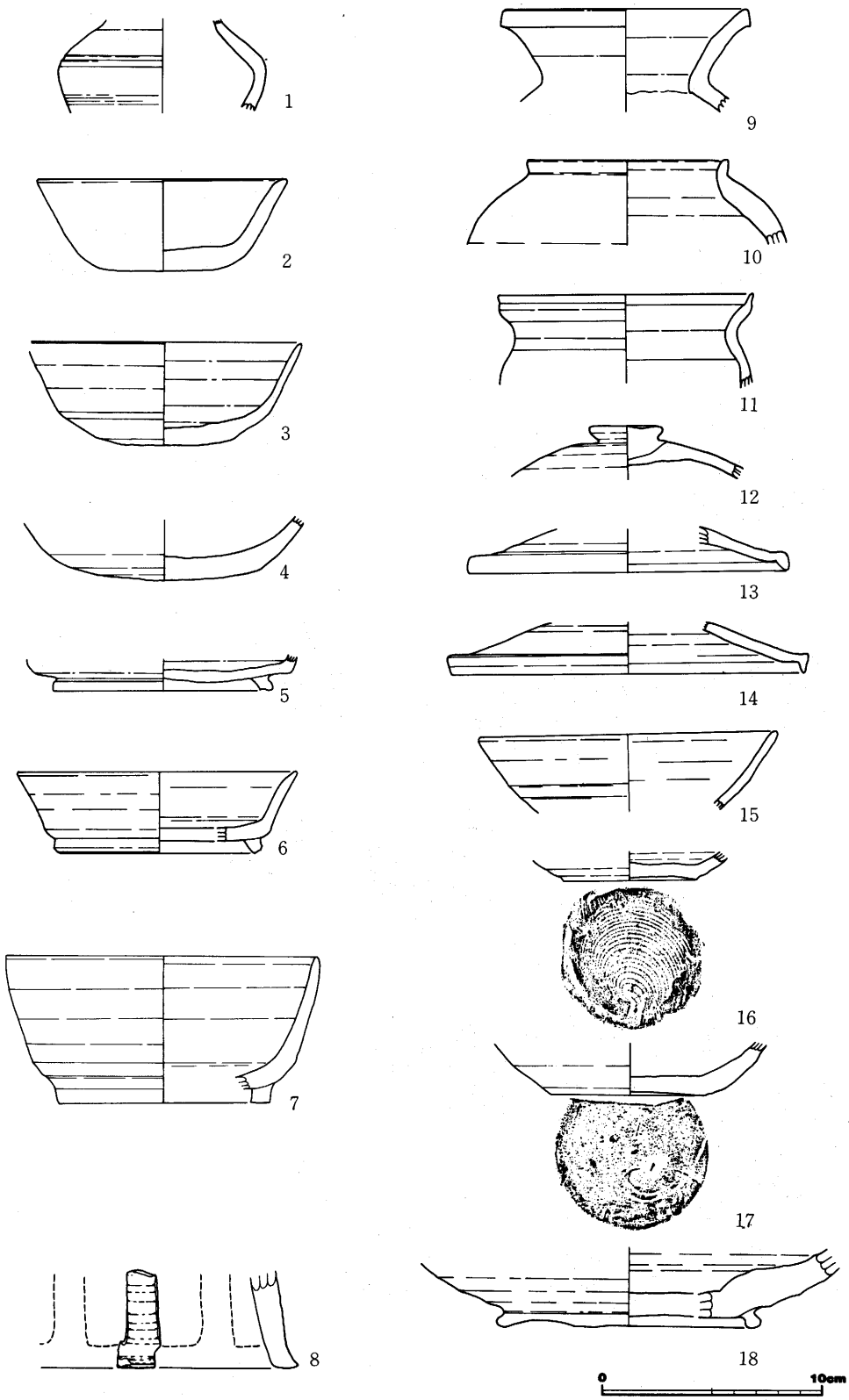
本住居址から出土した遺物は灰釉陶器の短頸壺１点（第１図11）、長頸壺1点（第２図６）が出土している。長頸壺は頸部下部から肩部にかけての破片による復元実測図である。肩部に一条の隆帯がめぐらされているのが特徴である。他に鉄滓が大量に出土している。

第Ｉ区１号土壙

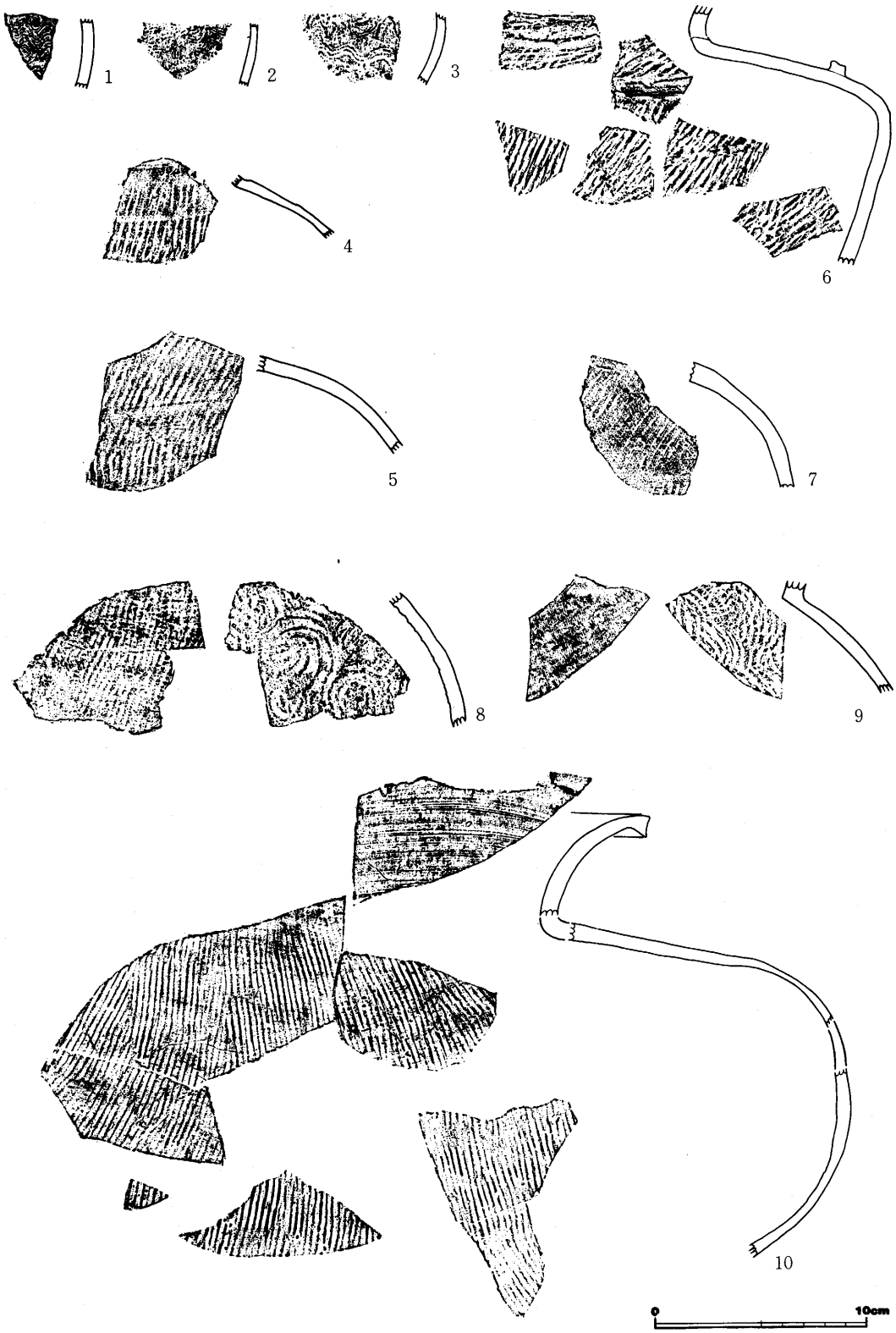
本土壙からは、土師器坏２点（第１図５、第５図Ａ、４）と須恵器坏１点（第１図18）が出土している。土師器坏は第５図Ａ、４が内面黒色坏であり、第１図５は高台坏である。本土壙出土の坏は、第５図Ａ、４のように底部を欠損しているものもあるが、須恵器坏とあわせて底部に糸切り痕を有すると考えられる。

第III区１号土壙

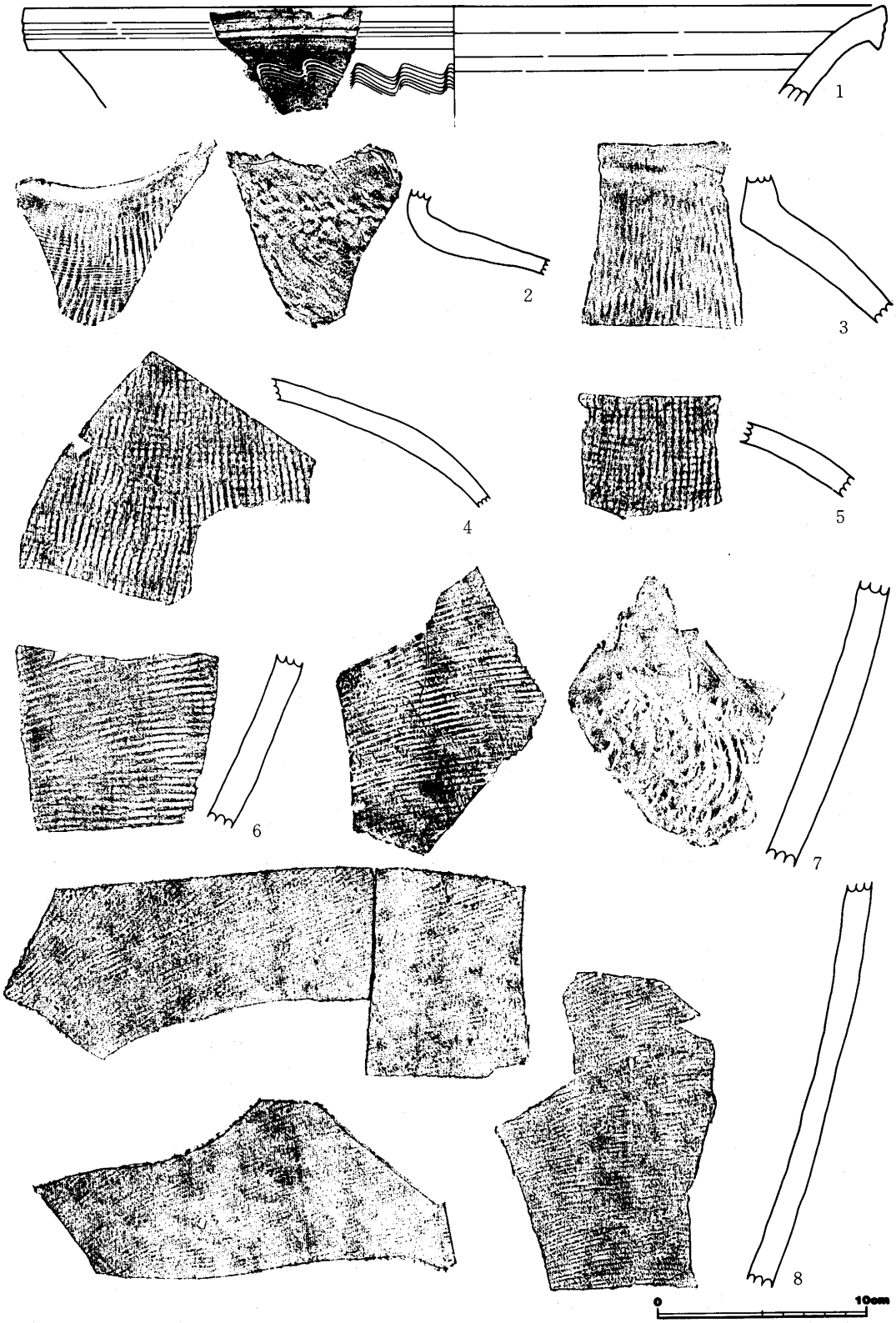
本土壙から出土した遺物も多く、その器種も多種にわたっている。土師器では無頸壺１点（第５図Ａ、１）、内面黒色坏２点（第５図Ａ、２、３）、甕４点（第４図１、２、６、８）、須恵器



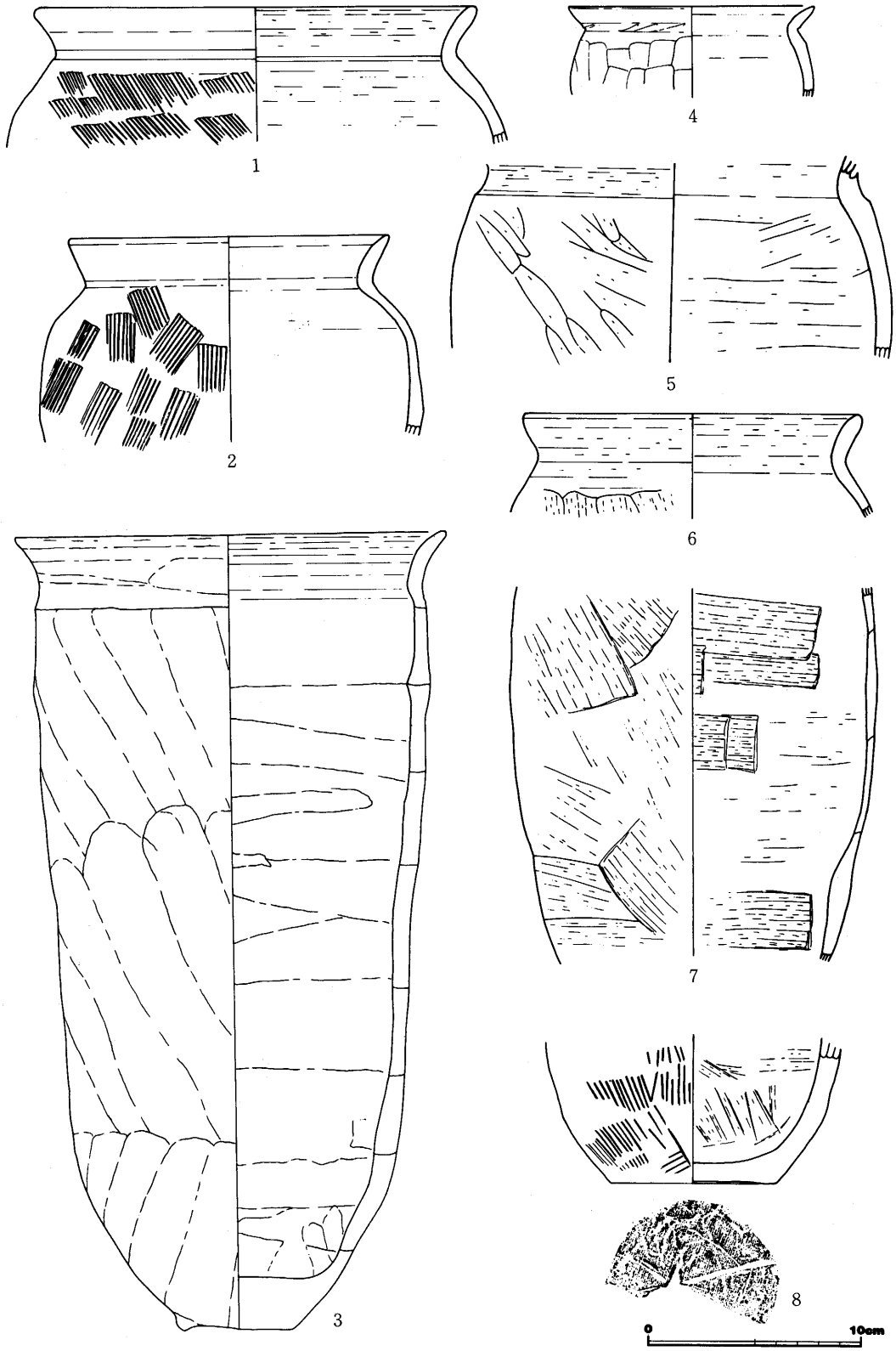
第16図　須恵器、灰釉陶器及び円面硯実測図



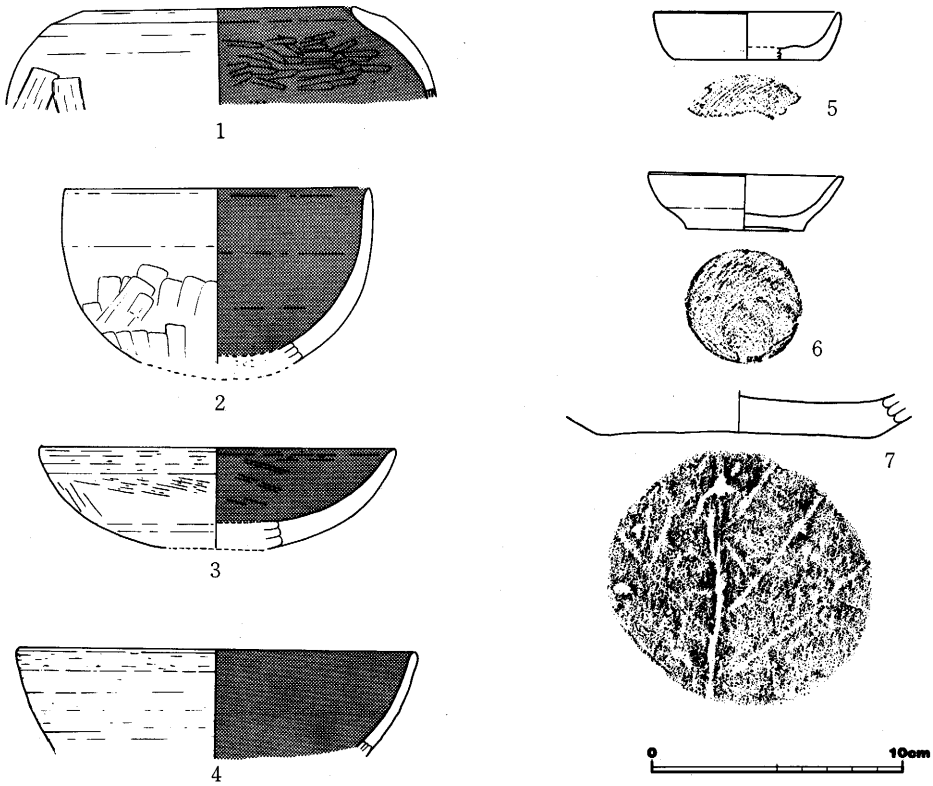
第17図　弥生土器及び須恵器実測図



第18図　須恵器拓本



第19図　土師器実測図



第20図　土師器及びカワラケ実測図

では坏３点（第１図２、３、４）、横瓶１点（第２図10)、大甕２点(第３図２、４)、円面硯の脚部破片１点（第１図８)、土製品としては土鈴（第５図Ｂ、１）などが出土している。これらの遺物の特色を以下あげていくと、甕は胴部が張る器形を呈しており、体部の整形にハケ整形を施している。そして坏では、土師器坏は内面黒色坏であり、須恵器坏は、底部ヘラ削りである。第５図Ａ、２は坏というよりも碗に近い器形を呈している。無頸壺も内面黒色研磨である。円面硯の脚部は透かしの間の１柱部分しか出土していないため全容は明らかではない。土鈴は、球状の体部に環状の把手が付されている。把手の先端は欠損している。器面は指頭痕のためか凸凹が激しい。下端には孔があけられ、中空の内部には径６㎜程の小玉が２個入っている。本遺構から出土した土器群は、奈良時代でも前半に位置付けられるものと考えられる。

その他の出土遺物

弥生土器　調査区内から数片出土している。そのうち３点を図示した（第２図１～３）。これらは櫛書き文の施された箱清水式のものである。

土師器、須恵器　調査区内から出土した土師器と須恵器の比率は圧倒的に須恵器が多くを占めている。多くの遺物の中で須恵器の代表的な器形を示すものと調整加工のはっきりしたものを図示するにとどめておく（第１図６、10、12)。

カワラケ　第II区の耕作土中より２点の燈明皿が出土している（第５図Ａ、５、６）。鎌倉時代のものと考えられる。

古銭　第II区の18号ピット内から一括し出土した。総枚数は11枚であるが、遺存状態は不良で、採拓できたものは内８枚である。その内訳は開元通宝（鋳造年621年）３枚と他は熙寧元宝（鋳造年1017年)、天禧通宝（鋳造年1008年)、元祐通宝（鋳造年1093年)、祥符通宝（鋳造年1008年)、聖宋通宝（鋳造年1107年）のおのおの１枚ずつである。開元通宝の３枚以外はすべて北宋銭である。

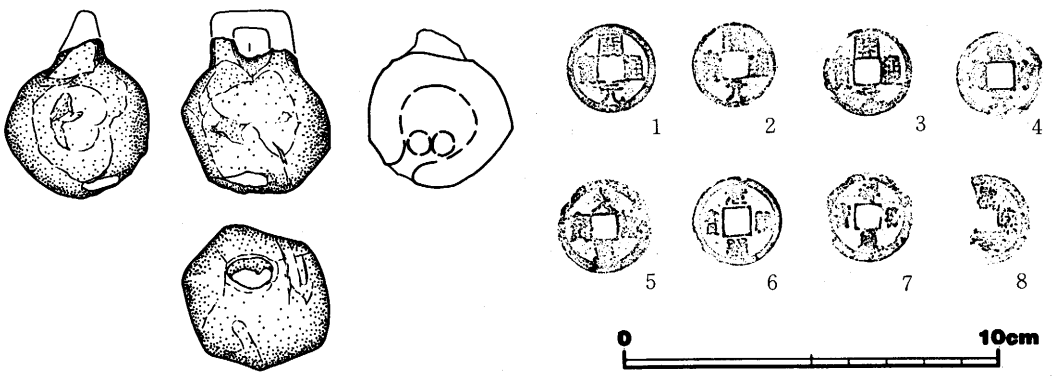
羽口　第II区４号住居址と２号住居址の間から、計10点出土している。全容をうかがえるものは３点であり、図示しえるものは６点である。その使用状況を復元するために模式図を付した。この模式図から鉄滓の付着状況、火の受け具合を観察することができる。羽口の炉壁に対する装着角度は、20度（第６図１、４）のものと、40度（第６図３）の２種類が考えられる。なお鉄滓の分析データは都合により後日にゆずることにしたい。

石器

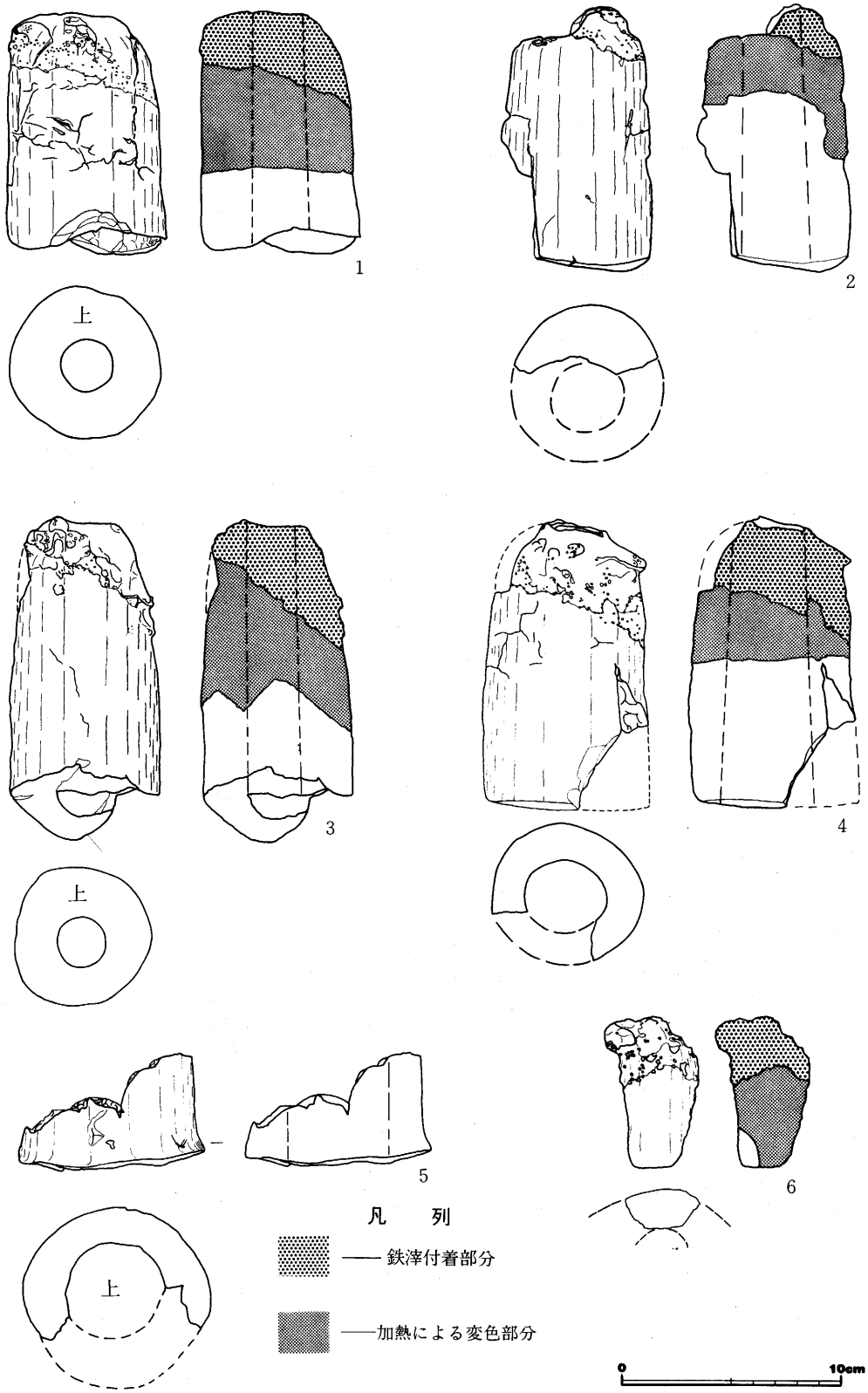
縄文時代の石器　第Ｉ、II区の耕作土中より石鏃、フレイク、打製石斧、敲石類が６点出土している（第７図１～６）。

石製支脚　一側面はひどくススけている。かまど内の支脚として用いられたものと考えられる（第７図７)。

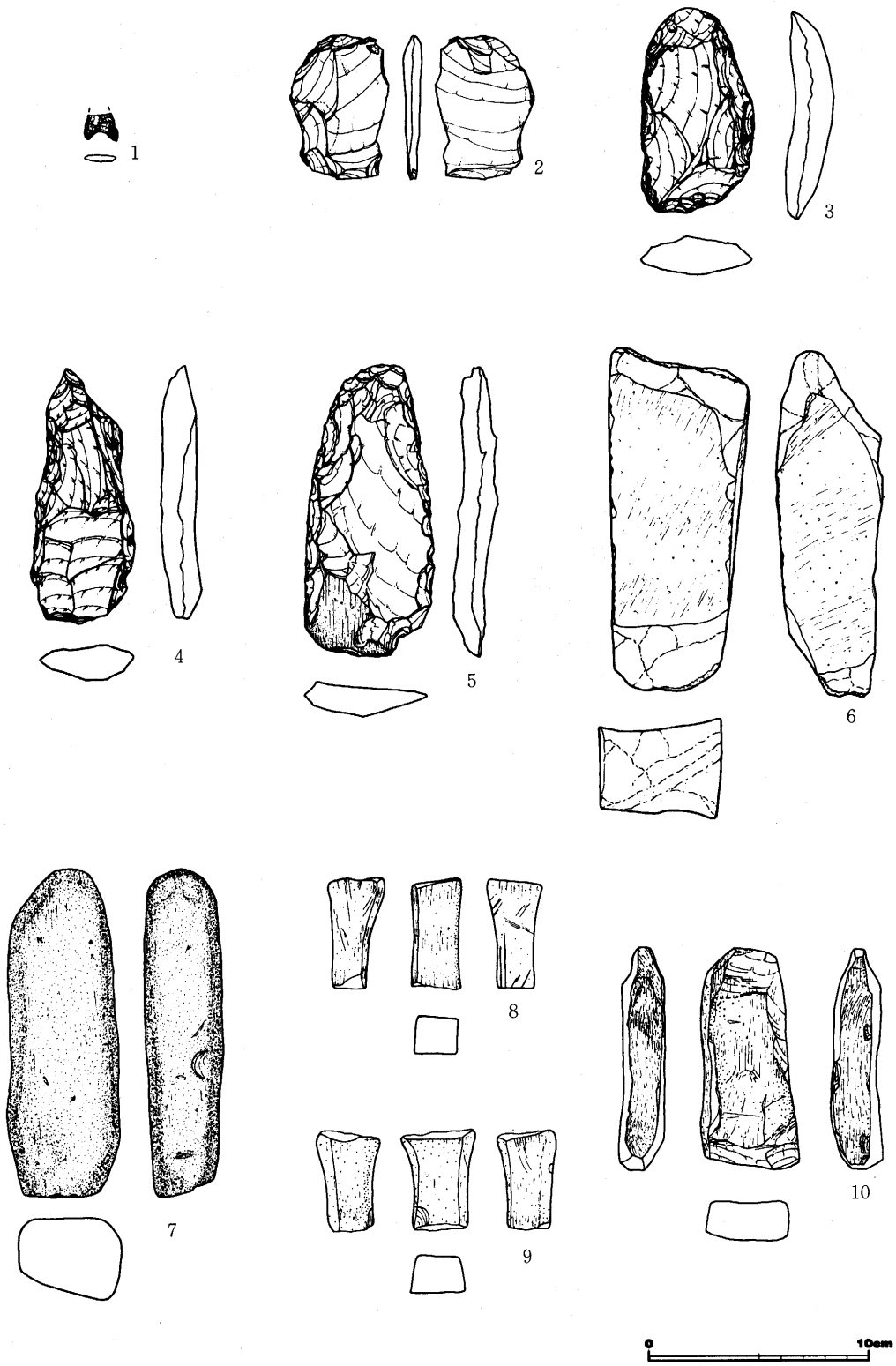
砥石　２点出土している（第７図８、10)。第７図８は砂岩を、同10は粘板岩を用いている。



第21図　土鈴実測図及び古銭拓本



第22図　羽口実測図



第23図　石器及び砥石実測図

第３表　出土土器一覧表

挿図番号	出土地点	器種	特徴
第16図１	第Ⅰ区１Ｇ	壺	細砂粒を少量含む。ロクロ調整後、胴部ヘラけずり。胴部はやや張り出し気味。焼成は良好。須恵質。
第16図２	第Ⅲ区１号土壙	坏	小礫と砂粒を少量含む。ロクロ調整。焼成は良好。須恵質。
第16図３	第Ⅲ区１号土壙	坏	径２㎜位の白砂を少量含む。ロクロ調整。底部は回転ヘラけずりで丸みを帯びている。焼成は良好。須恵質。
第16図４	第Ⅲ区１号土壙	坏	砂粒を少量含む。ロクロ調整。焼成は良好。須恵質。
第16図５	第Ⅰ区１号土壙	坏	白砂を少量含む。ロクロ調整。底部は回転糸切り。断面方形の高台を付し、接合部はヘラ調整。焼成は良好。須恵質。
第16図６	第Ⅱ区７Ｇ	坏	細砂粒を少量含む。ロクロ調整。断面方形の高台を付す。焼成は良好。内面は赤褐色を呈す。須恵質。
第16図７	第Ⅰ区１号住居址	坏	砂粒を少量含む。ロクロ調整。断面方形の高台を付す。焼成は良好。須恵質。
第16図８	第Ⅲ区１号土壙	円面硯	細砂粒を少量含む。ロクロ調整。脚部はやや外反気味。焼成は良好。黒灰色を呈す。須恵質。
第16図９	第Ⅰ区17Ｇ	壺	細砂粒を少量含む。ロクロ調整。口縁部ヘラけずり。焼成は良好。須恵質。
第16図10	第Ⅱ区４号住居址	短頸壺	細砂粒を多量に含む。ロクロ調整。口縁部は直に立ちあがる。内外面とも釉薬がかかっている。焼成は良好。灰釉陶器。
第16図11	第Ⅰ区１号ピット	壺	細砂粒を少量含む。ロクロ調整。焼成は良好。やや細みの口唇部をもつ。須恵質。
第16図12	第Ⅰ区１号住居址	蓋	細砂粒を少量含む。ロクロ調整。内面は赤褐色。須恵質。
第16図13	第Ⅰ区31Ｇ	蓋	細砂粒を少量含む。ロクロ調整。輪積み痕を残す。口唇部は屈曲してやや外反する。焼成は良好。須恵質。
第16図14	第Ⅰ区１Ｇ	蓋	白色細砂粒を少量含む。ロクロ調整。口唇部は直に屈曲する。焼成は良好。須恵質。
第16図15	第Ⅱ区22Ｇ	坏	砂を少量含む。ロクロ調整。焼成は良好。須恵質。
第16図16	表　採	坏	細砂粒を多量に含む。ロクロ調整。底部は右回り回転糸切り輪積み痕を残す。焼成は良好。須恵質。
第16図17	第Ⅰ区１号土壙	坏	細砂粒を少量含む。ロクロ調整。底部は回転糸切り。須恵質。
第16図18	第Ⅱ区16Ｇ	坏	砂粒を含む。ロクロ調整。やや丸みを帯びた高台を有する。焼成は良好。須恵質。

挿図番号	出土地点	器種	特徴
第17図1	第Ⅳ区15号ピット	甕	砂粒を多量に含む。胴部に櫛描文を有する箱清水式。焼成は良好。暗褐色を呈す。
第17図2	第Ⅲ区8G	甕	砂粒を多量に含む。胴部にやや幅広の櫛描文を有する箱漬水式。焼成は良好。赤褐色を呈す。
第17図3	第Ⅱ区4号住居址	甕	砂粒を多量に含む。胴部に幅広の櫛描文を有する箱漬水式。焼成は良好。黄灰色を呈す。
第17図4	第Ⅱ区4号住居址	甕	砂粒を少量含む。外面は平行叩目文を有し、内面はナデ調整焼成は良好。外面は灰色。内面は黒灰色を呈す。須恵質。
第17図5	第Ⅱ区12・17G	甕	砂粒を少量含む。外面は平行叩目文を有し、内面はナデ調整焼成は良好。外面は暗灰色、内面は黒灰色を呈す。須恵質。
第17図6	第Ⅱ区4号住居址	長頸壺	砂粒を少量含み、頸部付近には特に砂粒が集まっている。外面は平行叩目文を有し、内面はナデ調整。焼成は良好。内外面とも暗黄灰色を呈す。須恵質。
第17図7	第Ⅱ区16G	甕	砂粒を少量含む。外面は平行叩目文を有し、内面はナデ調整焼成は良好。内外面とも暗灰色を呈す。須恵質。
第17図8	第Ⅱ区12G	甕	砂粒を少量含む。外面は平行叩目文を有し、内面には青海波文を残す。焼成は良好。内外面とも暗灰色を呈す。須恵質。
第17図9	第Ⅱ区2号住居址	壺	外面には釉薬が塗られ、内面には青海波文を残す。焼成は良好。須恵質。
第17図10	第Ⅲ区1号土壙	横瓶	砂粒をほとんど含まず、口縁部から頸部にかけては横ナデ。胴部は平行叩目文を有し、内面には凸凹を残す。肩部においては2㎜と器壁は薄い。焼成は良好。須恵質。
第18図1	第Ⅰ区6G	壺	砂粒をほとんど含まず、口唇部に2条の沈線が巡らされ、口縁部には櫛描波状文が施される。口唇部は鳥頭状を呈する。焼成は良好。須恵質。
第18図2	第Ⅲ区1号土壙	甕	砂粒をほとんど含まず。頸部から肩部にかけて、外面は平行叩目文を有し、その上をハケ目調整し、内面は青海波文を残す。焼成は良好。須恵質。
第18図3	第Ⅰ区27G	甕	砂粒をほとんど含まず。頸部から肩部にかけて、外面は平行叩目文を有し、頸部付近はナデ調整が施される。焼成は良好。須恵質。

挿図番号	出土地点	器種	特徴
第18図4	第Ⅲ区1号土壙	甕	砂粒をほとんど含まず。外面は格子叩目文を有し、内面には指頭痕を残す。焼成は良好。須恵質。
第18図5	第Ⅲ区5G	甕	砂粒をほとんど含まず。外面は格子叩目文を有す。焼成は良好。須恵質。
第18図6	第Ⅲ区24G	甕	砂粒をほとんど含まず。外面は平行叩目文を有す。焼成は良好。須恵質。
第18図7	第Ⅳ区15G	甕	砂粒をほとんど含まず。外面は平行叩目文を有し、内面は青海波文を残し、一部はナデ調整が施される。焼成は良好。須恵質。
第18図8	第Ⅰ区1号住居址	甕	砂粒を少量含む。外面は平行叩目文を有す。焼成は良好。須恵質。
第19図1	第Ⅲ区1号土壙	甕	砂粒・角セン石等を含む。口縁部はく字状に外反し、口縁部はヨコナデ。胴部はハケ目調整。焼成は良好だが、全体的に風化が激しい。橙褐色を呈す。土師質。
第19図2	第Ⅲ区1号土壙	甕	白色細砂粒、小石等少量含む。口縁部はく字状に外反し、肩部が張っている。口縁部はヨコナデ。胴部はハケ目調整。内面はヨコナデ。焼成は良好。全体的に風化が激しい。土師質。
第19図3	第Ⅱ区3号住居址	長胴甕	長石・輝石・小石等多量に含む。口縁部はく字状にゆるやかに外反し、直線的な胴部に移行する。口縁部はヨコナデ。胴部上半は右下りのヘラけずり。下半は左下がりのヘラけずり。内面には輪積み痕を残す。焼成は良好。土師質。
第19図4	第Ⅰ区1号住居址	甕	雲母を少量含む。口縁部はく字状に外反し、直線的な胴部に移行する。口縁部はヨコナデ。胴部は縦位のヘラけずり。焼成は良好。土師質。
第19図5	第Ⅳ区1号土壙	甕	砂粒を少量含む。内外面とも頸部はヨコナデ。胴部は斜行のヘラけずり。焼成は良好。土師質。
第19図6	第Ⅲ区1号土壙	甕	雲母を少量含む。口縁部はく字状に外反し、ヨコナデ。胴部は縦位のヘラけずり。焼成は良好。土師質。
第19図7	第Ⅱ区3号住居址	長胴甕	細砂粒を多量に含む。器壁は3～4㎜と薄く、内外面ともヘラけずり。焼成は良好。土師質。
第19図8	第Ⅲ区1号土壙	甕	胎土は精選され、外面は荒いハケ目調整。内面はヘラけずり。底部には木葉痕を残す。焼成は良好。内外面とも茶褐色を呈す。土師質。

挿図番号	出土地点	器種	特徴
第20図1	第Ⅲ区1号土壙	無頸壺	細砂粒を少量含む。口唇部はヨコナデ。内外面ともヘラ磨き調整。焼成は良好で、内面は黒色を呈す。土師質。
第20図2	第Ⅲ区1号土壙	埦	小礫を多量に含む。口縁部はヨコナデ。底部付近は縦位のヘラけずり。胴部から口縁部にかけて直に立ちあがる。焼成は良好で、内面は黒色を呈す。土師質。
第20図3	第Ⅲ区1号土壙	坏	径2㎜程の砂を少量含む。口縁部・胴部ともヨコナデ。底部は丸みを帯びている。焼成は良好で、内面は黒色を呈す。土師質。
第20図4	第Ⅰ区1号土壙	坏	細砂粒を少量含む。口縁部・胴部ともヨコナデ。焼成は良好で、内面は黒色を呈す。土師質。
第20図5	第Ⅱ区10G	坏	細砂粒を少量含む。ロクロ整形。底部は平底で糸切り痕を残す。焼成は良好で、内面は黒色を呈す。土師質。
第20図6	第Ⅱ区6号ピット	坏	細砂粒を少量含む。ロクロ整形。底部は上げ底で糸切り痕を残す。焼成は良好。赤灰色を呈す。土師質。
第20図7	第Ⅱ区3号住居址	甕	細砂粒を少量含む。底部は比較的厚く、木葉痕を残す。焼成は良好で、赤褐色を呈す。土師質。

第4表　出土羽口一覧表

挿図番号	出土地点	外径cm 内径cm 全長cm	表面色調 裏面色調	特徴	残量
第22図1	第Ⅱ区16G	7.0 2.4 11.0	黒灰色～茶褐色 灰褐色～茶褐色	胎土には微細な砂粒を含む。表面縦方向にナデがあり、先端部には指頭痕がある。	上半 3/4～4/5 基部は欠損
第22図2	第Ⅱ区16G	(7) (3) 12.0	黒灰色～淡褐色 明赤褐色	胎土には微細な砂粒を含み、輝石も含む。	中央部～基部 1/4
第22図3	第Ⅱ区16G	6.0 2.2 14.5	黒灰色～明赤褐色 黒灰色～明茶褐色	胎土には微細な砂粒を含む。中央部から基部にかけて指頭痕がある。	先端部～基部 4/5
第22図4	第Ⅱ区16G	7.0 3.8 13.0	黒灰色～淡赤褐色 黒灰色～明赤褐色	胎土に微細な砂粒を含み、さらに輝石もかなり含む。	先端部～基部 1/2

挿図番号	出土地点	外径cm 内径cm 全長cm	表面色調 裏面色調	特　　徴	残　量
第22図5	第II区16G	8.5 4.5 5.0	淡赤褐色 淡赤褐色	胎土に微細な砂粒を含む。表面縦方向にヘラみがき、孔面には横方向にナデがみられる。	基　部 1/5
第22図6	第II区16G	— — 7.0	黒灰色～淡茶褐色 黒灰色～明赤褐色	胎土に微細な砂粒を少量含む。	先端部 1/10

第5表　石器一覧表

挿図番号	出土地点	器　種	石質	長さ	幅	厚さ	特　　徴
第7図1	I区14G	石鏃	黒曜石	1.3	1.5	0.2	頭部欠損、基部凹基
第7図2	I区4号ピット	フレイク	砂岩	7.0	4.5	0.8	
第7図3	I区19G	打製石斧	粘板岩	9.5	5.1	1.7	撥形。片面に自然面を残す。左右両側縁に細かな調整加工。
第7図4	I区27G	打製石斧	砂岩	11.4	4.7	1.6	基部欠損、右側縁に大きな剝離が残り、先端が尖る。未成品か。
第7図5	II区22G	打製石斧	砂岩	13.1	5.8	1.3	基部に節理面を残す。先端部欠損。周縁部に細かな調整加工。
第7図6	IV区18G	敲石	砂岩	15.4	6.4	4.6	両端部に敲き痕が認められる。風化が激しい。
第7図7	II区11号ピット	石製支脚	砂岩	14.7	5.2	3.6	1側面が焼けて黒くなっている。
第7図8	I区27G	砥石	砂岩	5.0	2.3	2.5	4面を砥面とし、1側面には縦方向の刃の痕跡が認められる。下部欠損。
第7図9	II区1号住居址	砥石	砂岩	4.5	3.3	2.9	4面を砥面とし、1側面に縦方向の細い線条痕が認められる。下部欠損。
第7図10	I区21G	砥石	粘板岩	10.0	4.6	2.4	3面を砥面とし、そのうち2面には鋭利な擦痕が認められる。

第5章　ま　と　め

稲羽北遺跡の発掘調査は８月にはいり、炎天のもとで実施されたが、この調査に至るまでの経過にはかなりの曲折があったと聞いている。もともと、この調査は昭和57年度事業の計画であった。しかし、調査体制がととのわなかったことから、１年延期した経緯があった。それが昭和58年度に至っても、地元の考古学研究者は他市町村の発掘調査に忙殺されたままで、とうてい丸子町の発掘を担当しうる状態にはならなかった。そこで、丸子町教育委員会はやむをえず遠隔地に在住する筆者に発掘調査の担当を依頼してきたものと思われる。私事にわたり恐縮であるが、丸子町と筆者との関係は因縁浅からぬものがあり、かつて地元の丸子実業高校に在職していたときは、稲羽北遺跡の下段丘にひろがる井戸下遺跡や、史跡・鳥羽山洞窟などの発掘調査を手がけたことがあった。また、県教育委員会在職中は稲羽北遺跡の保護協議に多少のかかわりをもったことや、最近では丸子町郷土博物館の展示企画専門委員の仕事を手伝っていた関係もあって、丸子町教育委員会の依頼を無下に断わるわけにはいかなくなってしまった。それで、地元の考古学研究者もこの調査に参画することを条件に、発掘調査の担当を承諾したわけである。

ところで、稲羽北遺跡のように、ほ場整備事業に伴う発掘調査は、多くの場合、農家個人の利害に深く関係するため、条件的には常に厳しいものと覚悟しなければならない。そのとおりに、事前の調査打合せでも、制約された期間内で発掘調査を完了するよう要請があった。もっとも、筆者をはじめ調査員も遠方から泊り込みでかけつけているような場合であるから、調査団側にも期間を短縮しなければならない事情があった。そのために、調査員１人につき約10人の作業員をつけ、１日平均40人以上の作業員を動員する計画をたてたのである。しかし、この計画を実際に実施してみて、確かに１日あたりの作業能率は高まったが、逆に調査員の疲労がはなはだしく、かなりの無理を強いる結果になってしまった。また、発掘調査員も単に員数さえそろえばよいというものではなく、作業員個人の興味や関心、あるいは多少の経験等が作業能率に著しく影響しており、やはり質的に精選された構成が最も望ましいと痛感した。いずれにしても、ここに発掘調査報告書をまとめるにあたり、稲羽北遺跡についていささか所見を述べておきたいと思う。

まず、稲羽北遺跡の立地について考えてみたい。遺跡は依田川下流の右岸域にあたり、千曲川左岸に形成された河岸段丘の第１段丘上に所在している。この段丘面は塩川面と称してきた所で、広大な平坦部がひらけ、塩川条里遺構群に包括されるいくつかの遺跡が分布している。その１つである稲羽北遺跡は集落址とされ、北端の段丘縁に沿って立地している。遺跡立地のあり方については、伊那谷等に発達している河岸段丘上の遺跡と通有するもので、特に言及する必要もなかろう。むしろ、ここで注目しておきたいことは、塩川条里遺構群の中枢をなす水田

址との関連であろう。この条里水田址は、今までの調査によれば、鎌倉時代頃に成立したのではないかとみられている。それに対し、稲羽北遺跡の主体的な時期は奈良時代から平安時代頃にさかのぼり、一部は鎌倉時代にも及んでいる。この両者の時期的なずれは、そのまま この塩川面上の歴史的変遷と解されるのである。

それでは、この条里遺構をもつ水田址はどのような背景のもとに開かれたのであろう。この塩川面は、もともとこれといった自然流にも恵まれず、水田に不適な水はけのよい乏水性の地質からなりたっている。したがって、塩川条里遺構の水田が開かれる以前は、一面の原野か、あるいは畑作地とか放牧地といったような土地利用がみられたのではなかろうか。それが平安時代末頃から鎌倉時代に至り、何かの要因で水田開発の対象になっていったものと考えられる。水利に恵まれないこの広大な平坦部に、あえて用水路を通し、条里区画をもつ水田を造成するためには、かなりの資力や労力が必要であったし、また、この地域に広い水田を必要とするさしせまった背景があったのであろう。

それについて、塩川条里遺構群をとりまく周辺の状況はどうかといえば、この依田川下流域地方は千曲川との合流点にあたり、遺跡が最も密着している地域である。遺跡の分布状況を大別すると、依田川左岸の依田地域、同右岸の長瀬地域、千曲川左岸の塩川地域とすることができる。このうち、広い扇状地の依田地域は、遺跡の分布密度が最も高く、一大中心地を形成している。他の2地域は、塩川条里遺構群のある塩川面を除けば、いずれも狭い河岸段丘に制約されて、依田地域ほどの遺跡のひろがりはない。また、遺跡が営まれた時期をみると、古墳時代以降になって遺跡数は急増しており、ことに古墳時代後期から奈良・平安時代にかけて著しい。いいかえれば、それまであまりふるわなかった農業開発が、この時期になって飛躍的に進んだ現象とみられるのであり、この地域における開発の高揚期といえるのである。そして、この高揚を背景に、塩川に先行する依田条里遺構の水田が開かれ、続いて塩川条里遺構に拡大したものと考えられる。さらに、推測をたくましくすれば、このような旺盛な開発機運があったからこそ、木曽義仲挙兵の地盤にもなりえたのであろう。とすれば、段丘縁の一集落である稲羽北遺跡は、この地方の高揚期に、塩川条里遺構が成立する以前から営まれており、あるいはこの水田開発に深くかかわっていたかもしれないのである。発掘調査における最大の関心はこの点におかれていたといっても過言ではなかった。

発掘調査の結果についてはすでに報告したとおりであるが、発掘によって検出された遺構は、住居址、土壙、ピット群の三つに大別される。このうち、時代がほぼ把握できたものをまとめると、次のとおりである。

〔住居址〕 第I区1号住居址（平安時代中期～後期）、第II区1号住居址（奈良・平安時代）、同2号住居址（奈良・平安時代）、同3号住居址（奈良時代　真間式併行期）、同4号住居址（奈良・平安時代）

〔土　壙〕 第III区1号土壙（奈良時代　真間式併行期）

〔ピット群〕　第II区６号ピット（鎌倉時代）、同18号ピット（鎌倉時代）

遺構の検出は全体に浅く、遺物包含層はかなり撹乱された状態であった。そのため、出土遺物による遺構の時期が同定できず、奈良・平安時代といった漠然とした判定にとどまるものが多かった。また、出土遺物も遺構数の割には細片が多く、時期判定を困難なものにした。

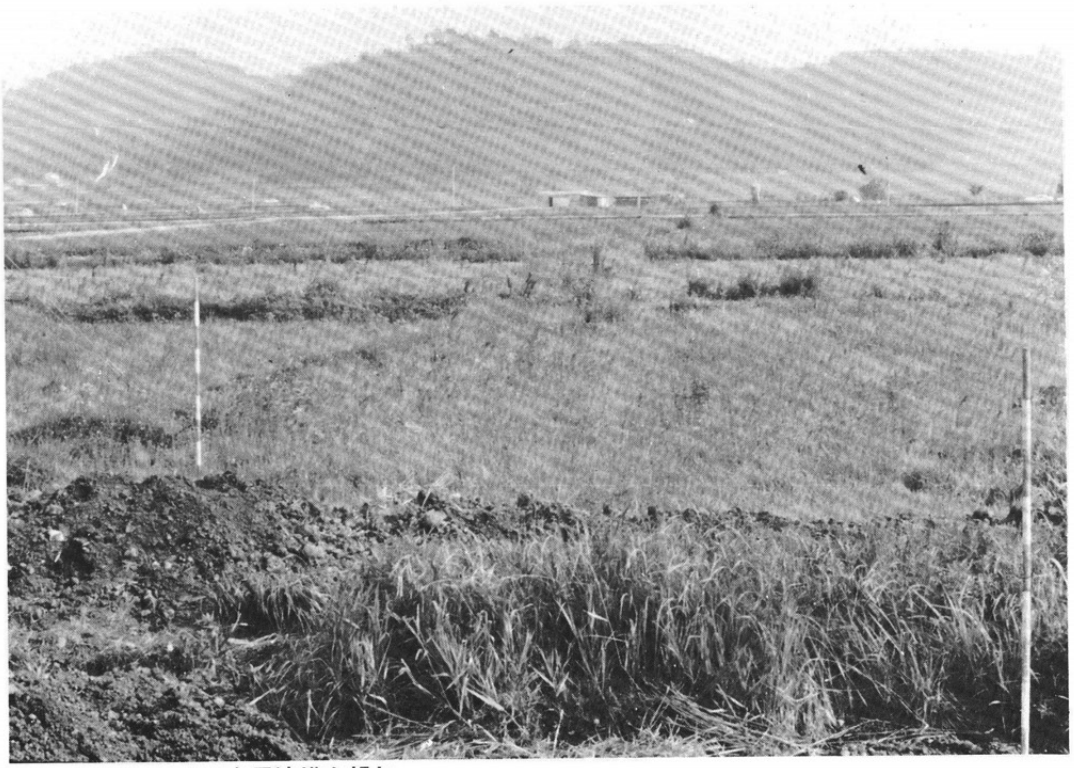
このような状態の中で、第II区４号住居址、第III区１号土壙、第II区６号ピットは比較的安定した状態を示し、撹乱も認められなかった。その第II区４号住居址は鍛冶工房址とでもいうべきもので、住居址内には炭溜めのピットや多量の鉄滓、あるいは近くからは羽口等が検出された。鉄滓の分析は本報告に間に合わなかったが、後日発表する予定である。第III区１号土壙では土鈴や円面硯の破片が発見された。土壙墓の副葬品であろうか。奈良時代の土鈴は珍らしい出土例である。第II区６号ピットはピット群というより柱穴に近いもので、その底深くからかわらけの完形品が１個単独出土した。他との関連が不明であるが、同じく18号ピットでは唐宋銭の出土があり、あるいは同一時期の所産と考えられるかもしれない。古銭のうち鋳造年代が最も新しいものは11世紀末にあたる元祐通宝であることからすれば、流通過程期間等を見込んでも、少なくとも平安時代末頃から鎌倉時代頃に比定して考えられる。

以上の調査結果から、稲羽北遺跡は段丘縁に沿って立地する一方、塩川条里水田をとり囲むように位置していること、集落が営まれた期間は限られていること、集落内に鍛冶等の諸機能がそなわっていたことなど、第１段丘（塩川面）における集落遺跡の一端を知ることができた。しかし、当初の関心事であった塩川条里的水田との関連については、何ら具体的は資料も えられなかった。やはり段丘面全体の遺跡が解明されて、はじめて総合的な把握が可能になる のであろう。また、塩川面の遺跡だけでなく、さらに濃密な分布を示す下段丘面の遺跡との関 連も考慮する必要がある。今の所、筆者らは、下段丘面は早くから集落の形成が進んだが、依 田地区と異なり、制約された地形であるため、人口増加等によって乏水性の塩川面へ進出が始 まったと考えている。当然のことながら、水田の不足も同時にさしせまった状況であったと思 われる。

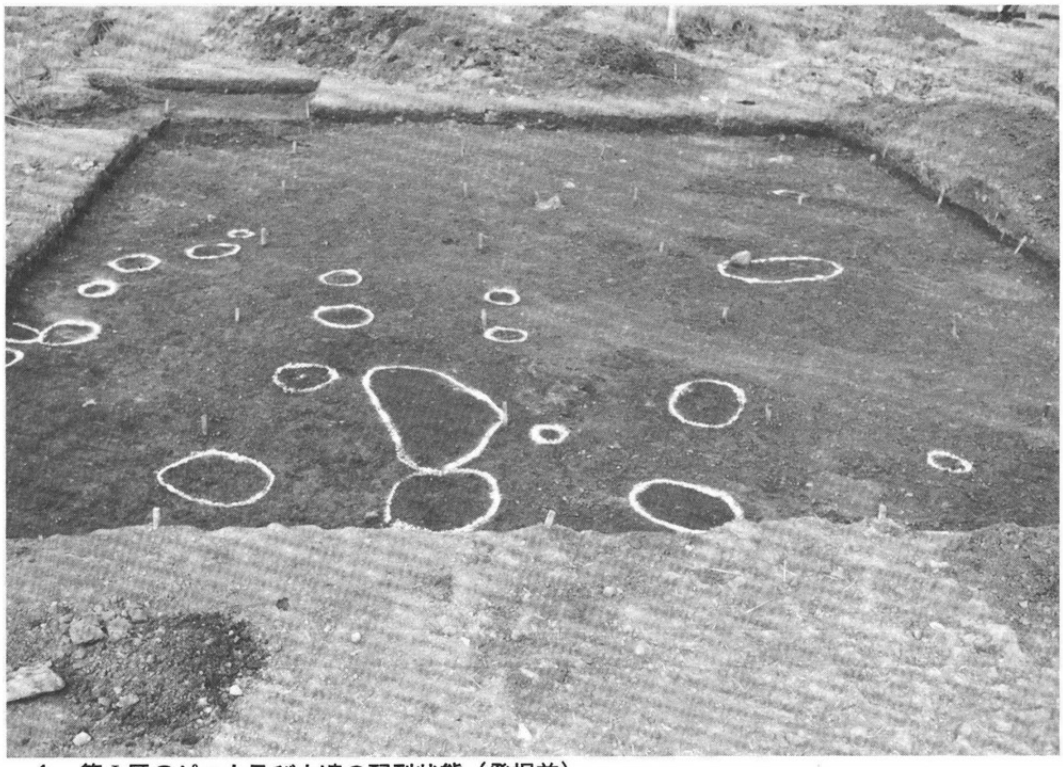
図　　版

図版 1

1　遺跡の遠景（千曲川対岸から）



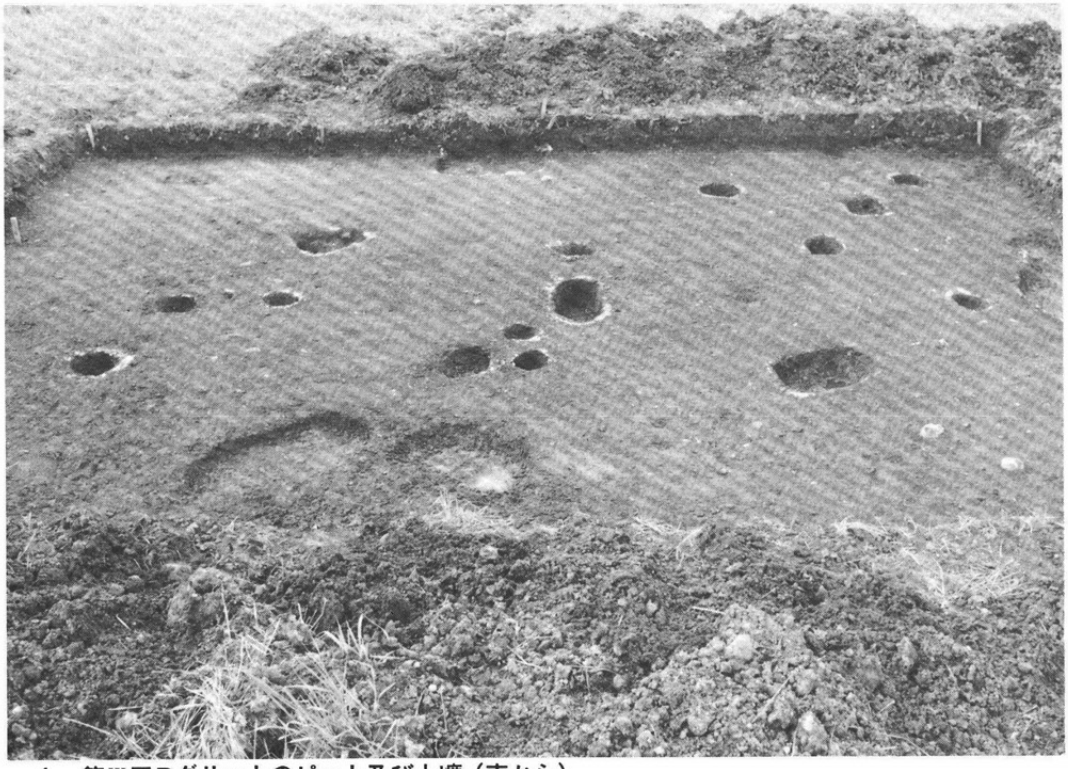
2　遺跡から塩川条里遺構を望む



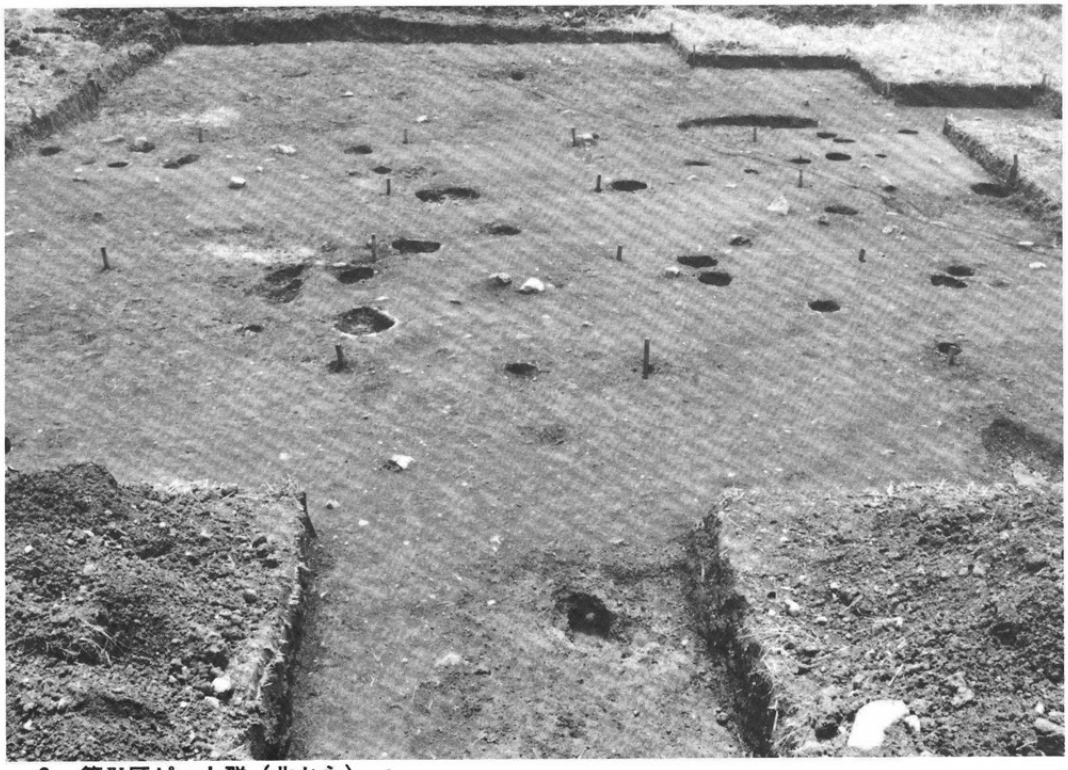
1　第Ⅰ区のピット及び土壙の配列状態（発掘前）

2　第Ⅲ区Ｂグリットのピット及び土壙の配列状態（発掘前）

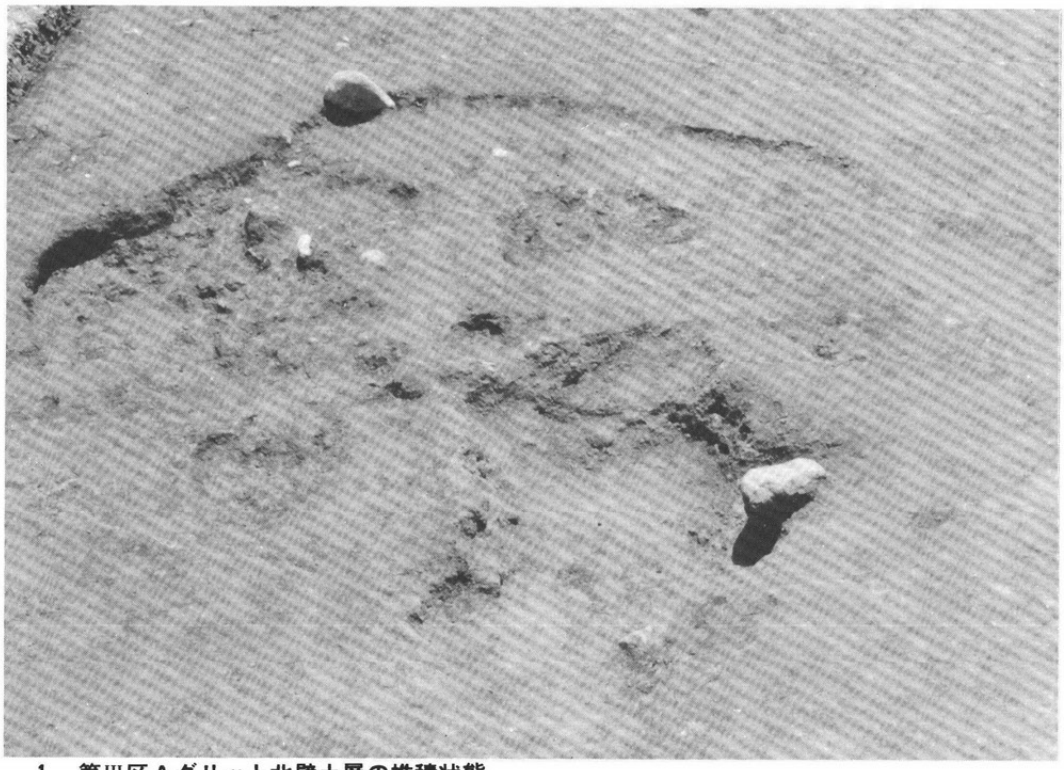
図版 3



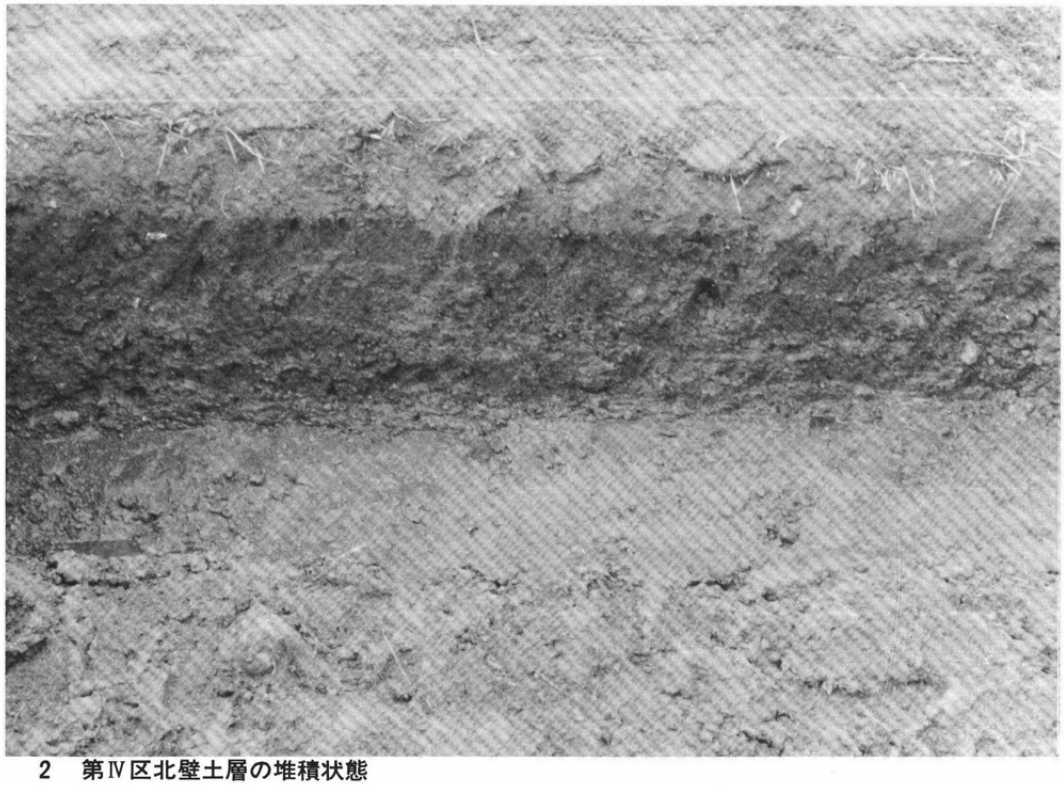
1　第Ⅲ区Bグリットのピット及び土壙（南から）



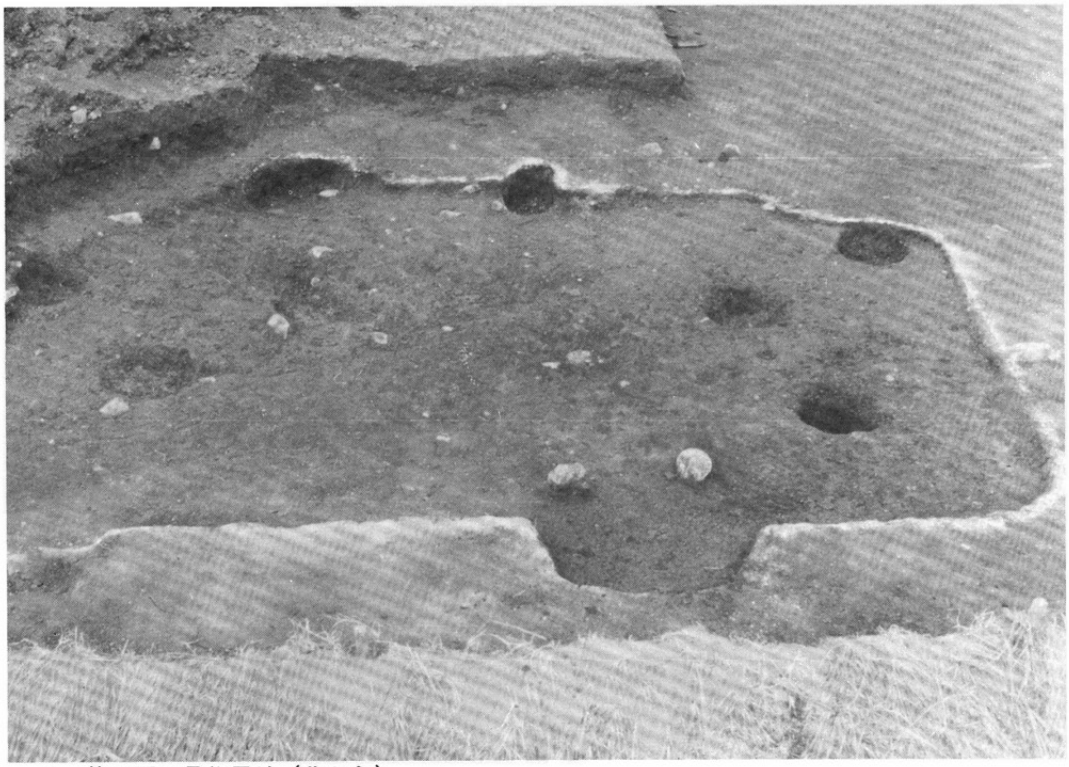
2　第Ⅳ区ピット群（北から）



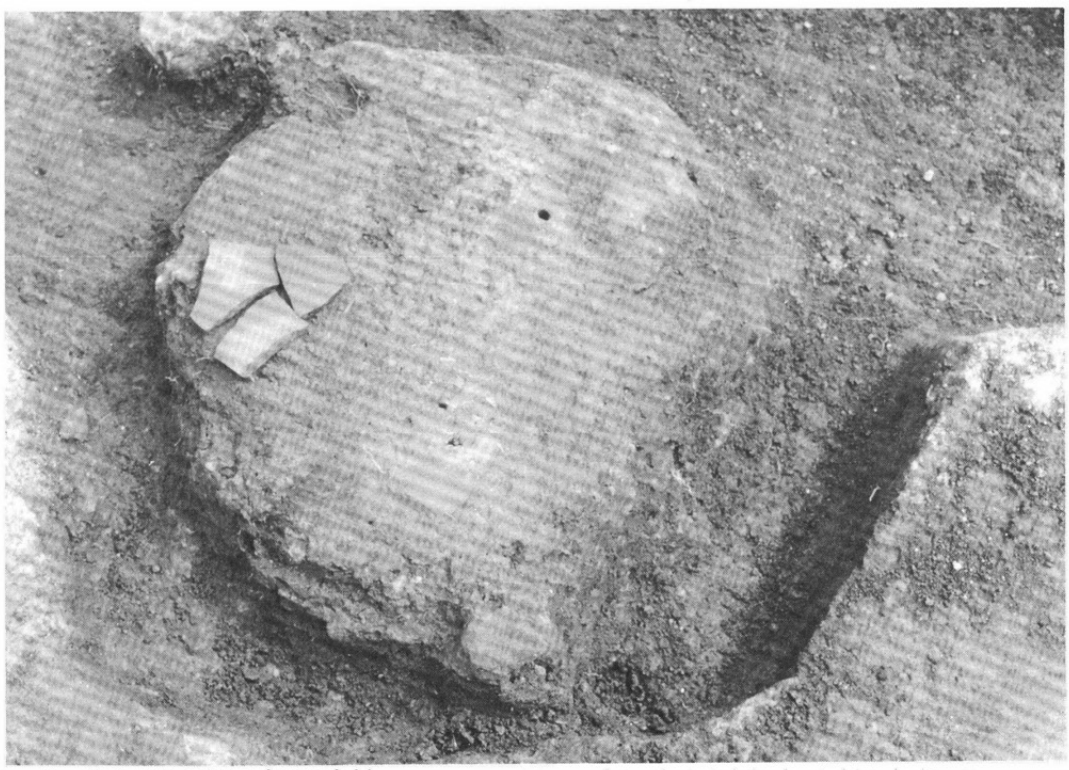
1　第Ⅲ区Ａグリット北壁土層の堆積状態



2　第Ⅳ区北壁土層の堆積状態

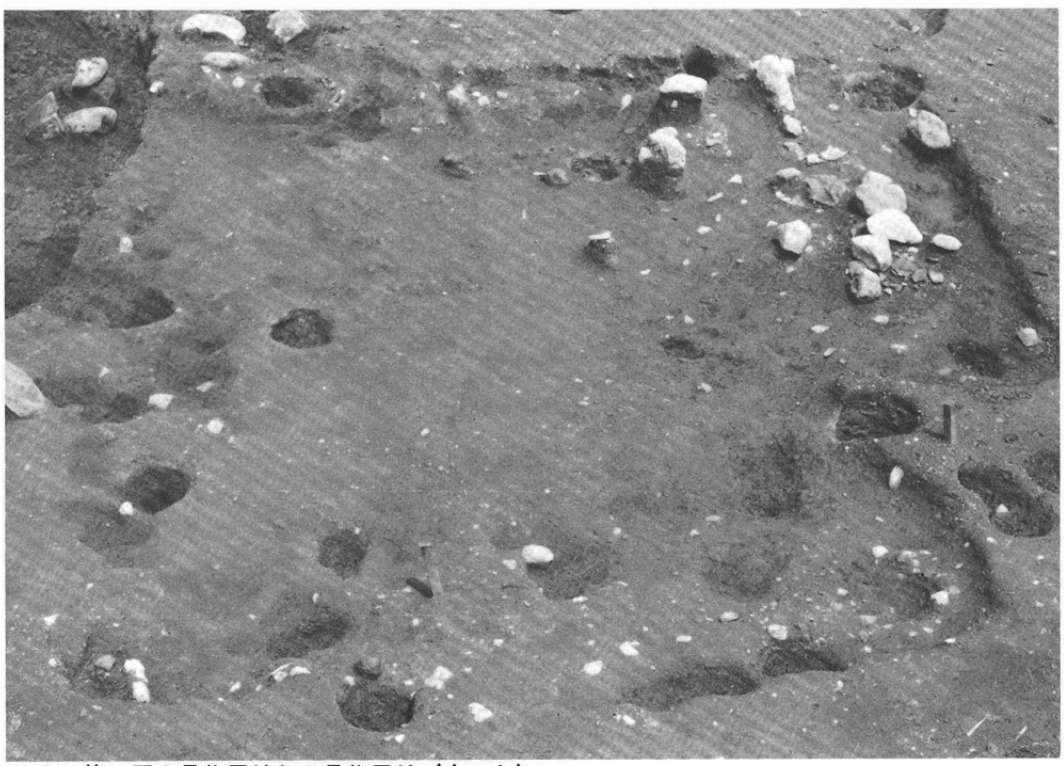


1　第Ⅰ区1号住居址（北から）



2　第Ⅰ区1号住居址のかまど

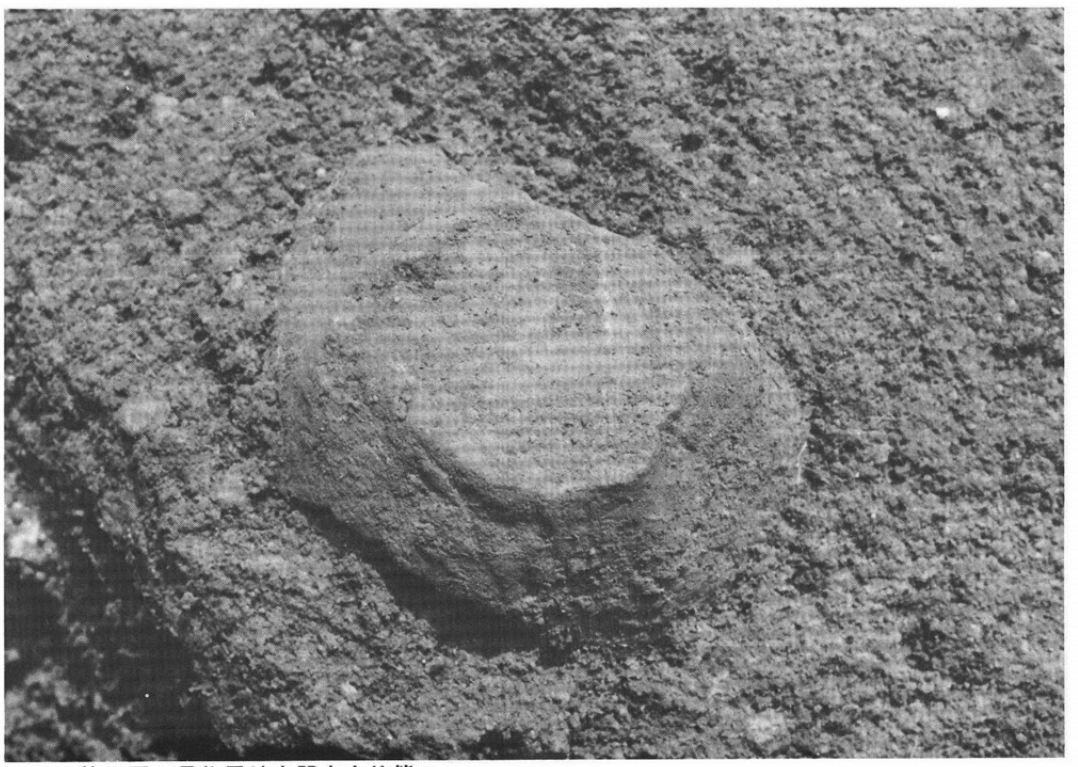
1　第II区1号住居址と2号土壙（南東から）



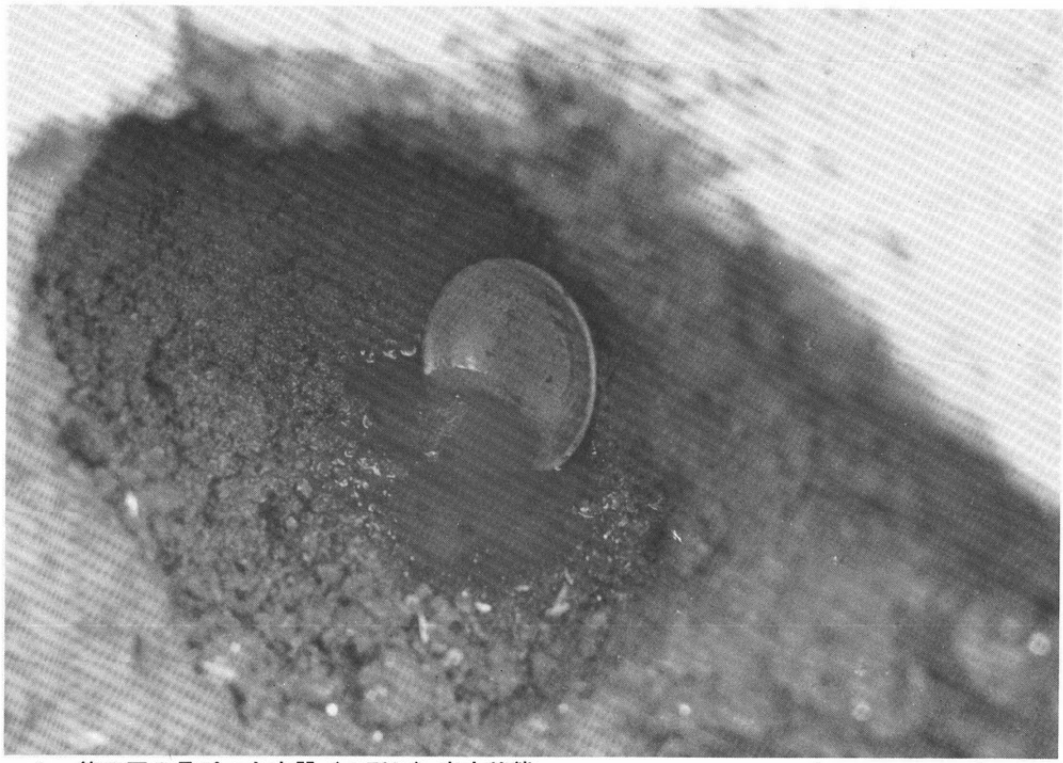
2　第II区2号住居址と3号住居址（南から）

図版 7

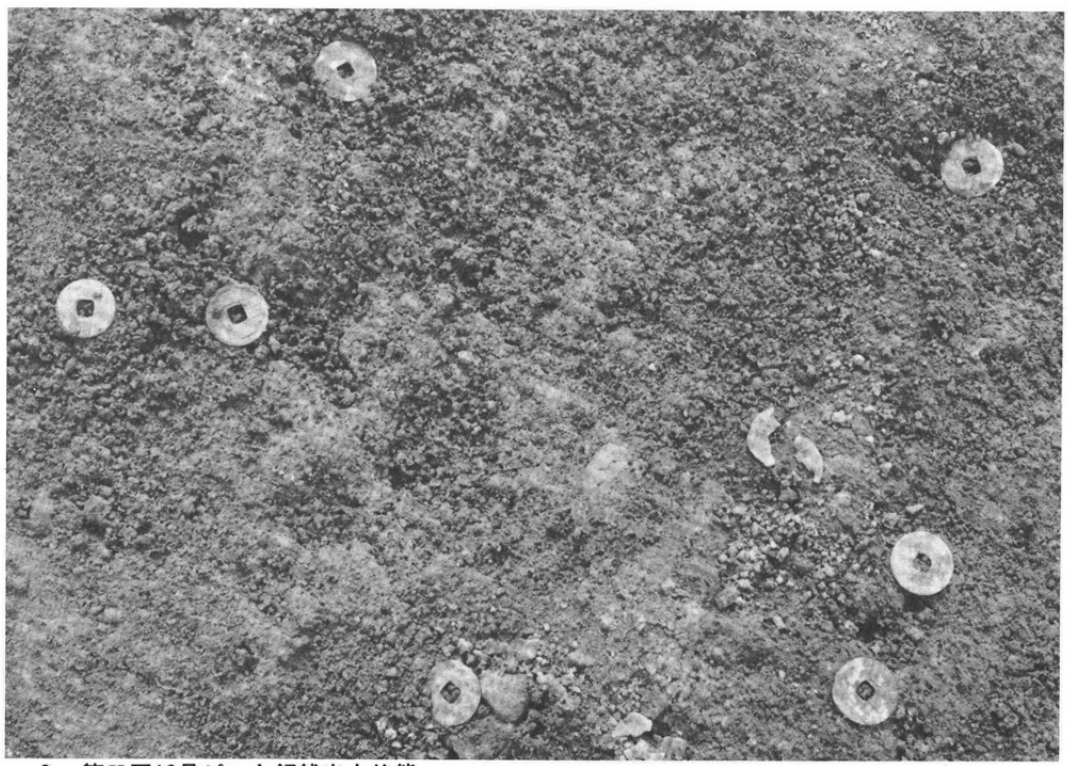
1　第II区3号住居址のかまど（南から）



2　第II区3号住居址土器出土状態



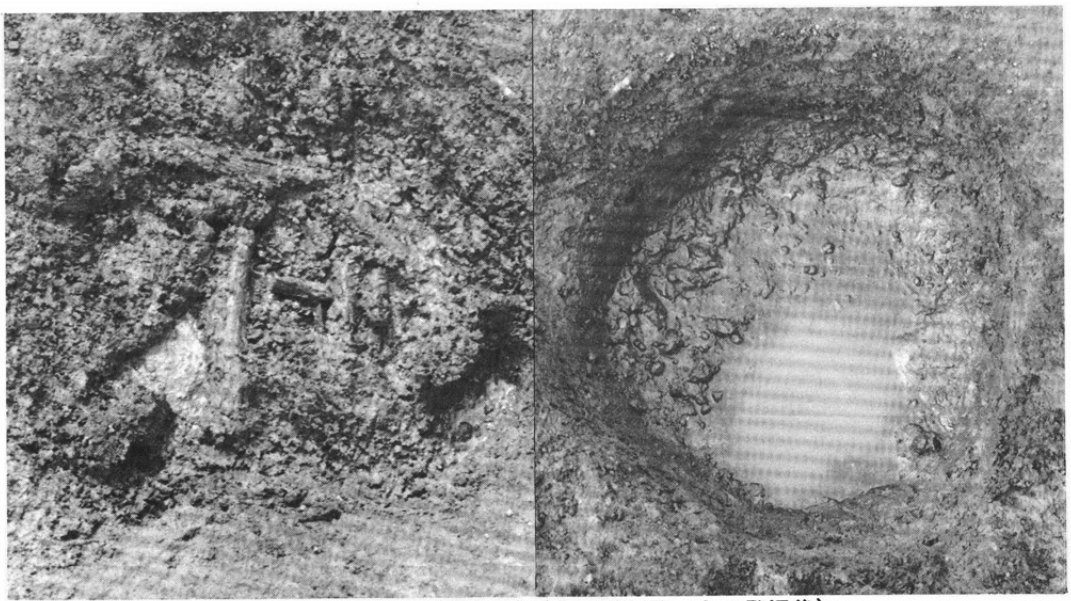
1　第II区6号ピット土器（小型杯）出土状態



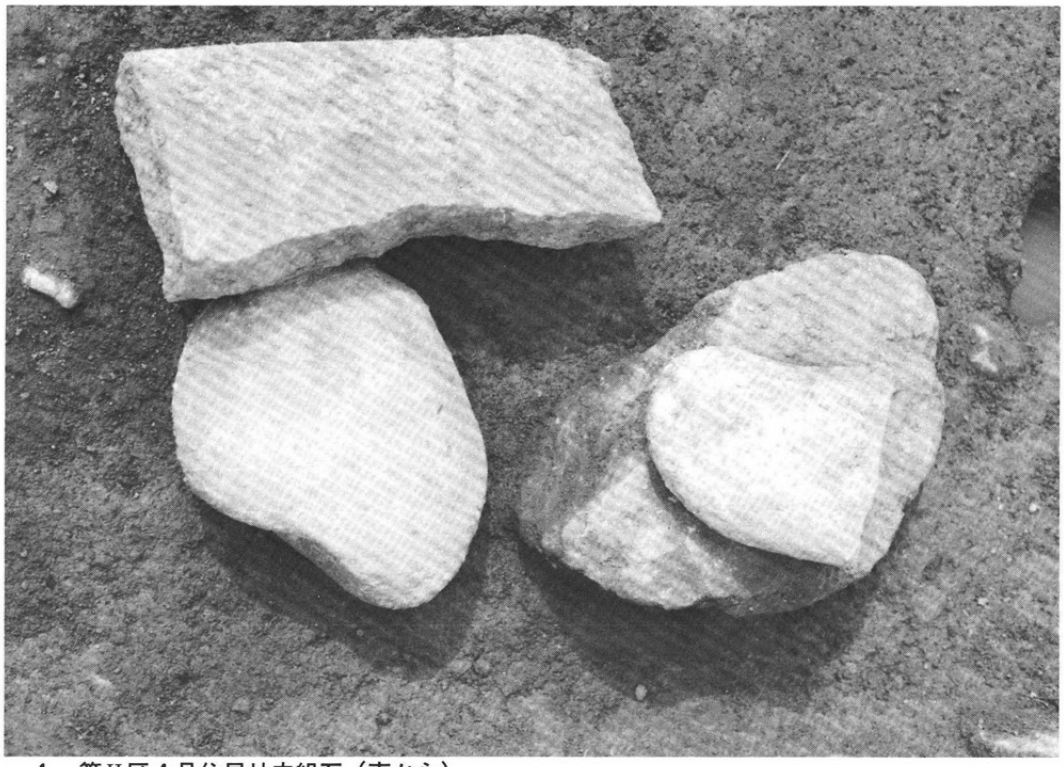
2　第II区18号ピット銅銭出土状態

図版 9

1　第II区４号住居址（南から）

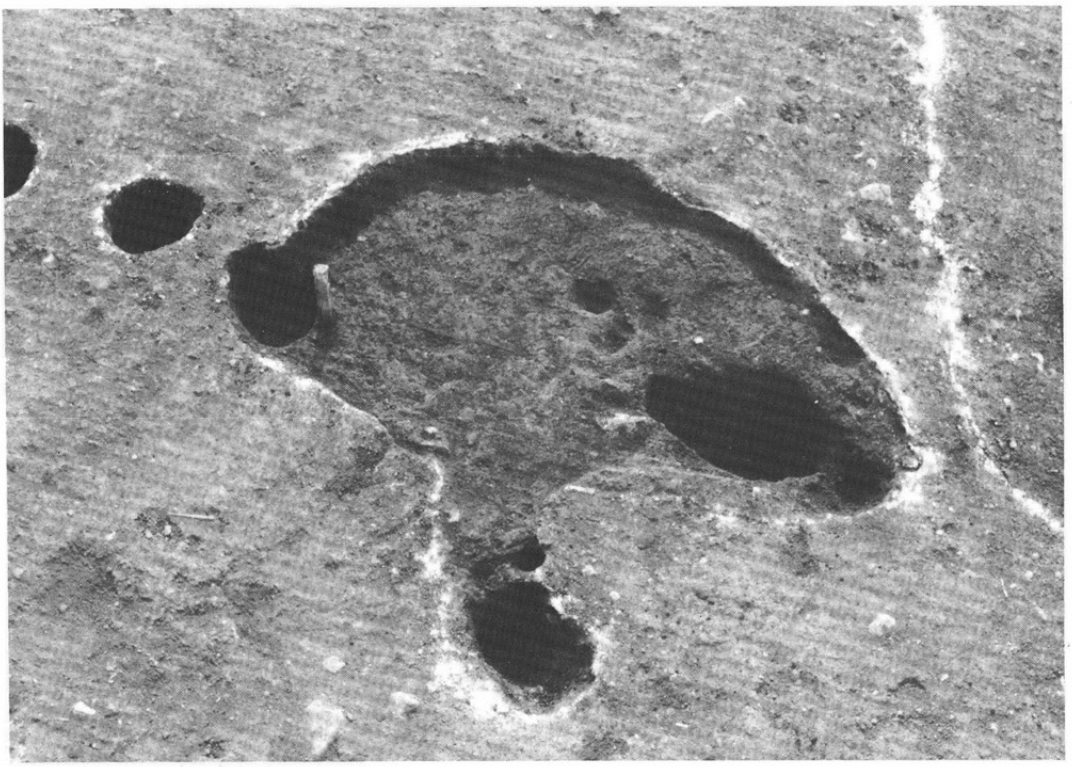


2　第II区４号住居址内３号ピット（炭だめ）（左：発掘前・右：発掘後）



1　第Ⅱ区４号住居址内組石（東から）

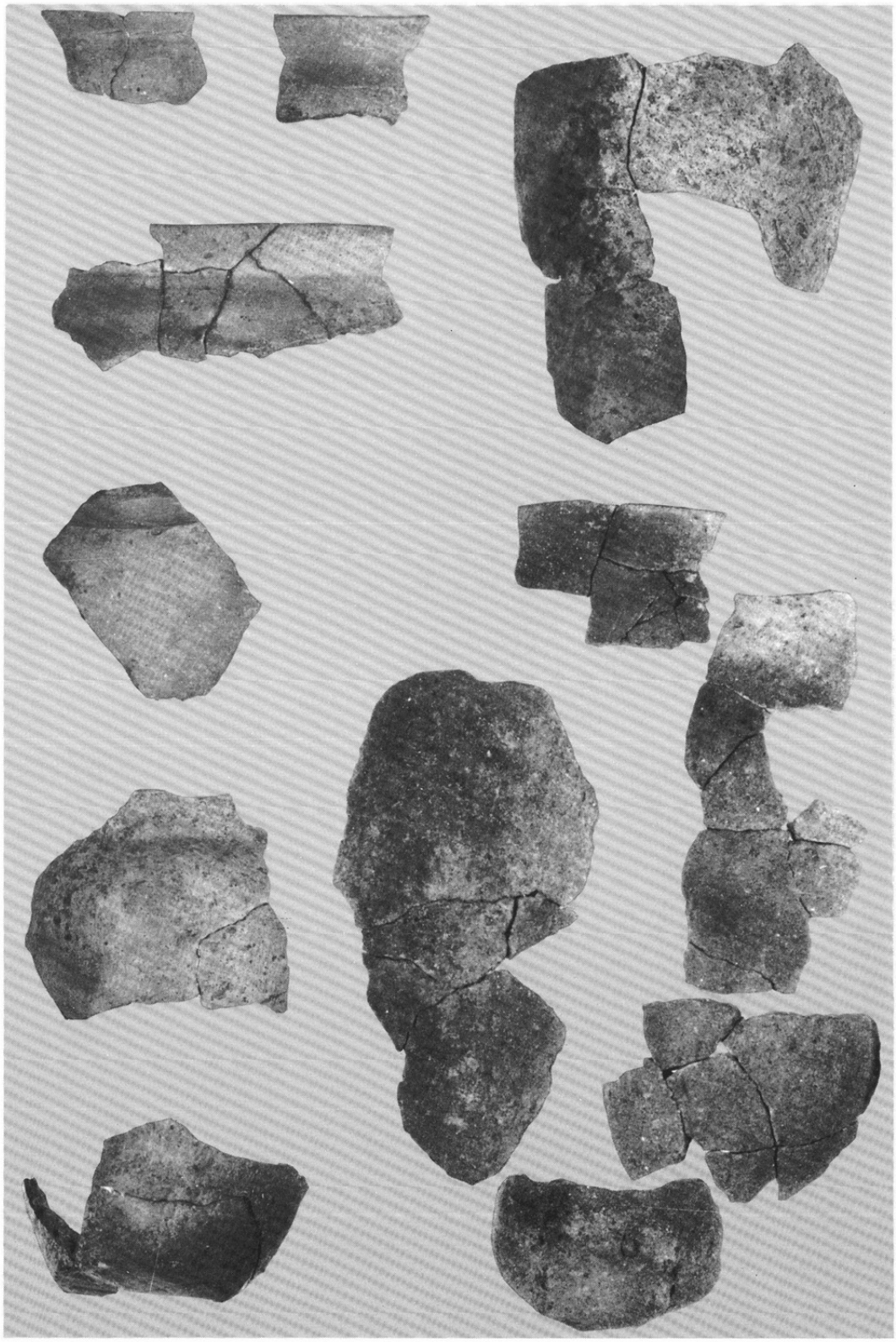
2　第Ⅱ区羽口出土状態



1　第II区3号土壙（東から）

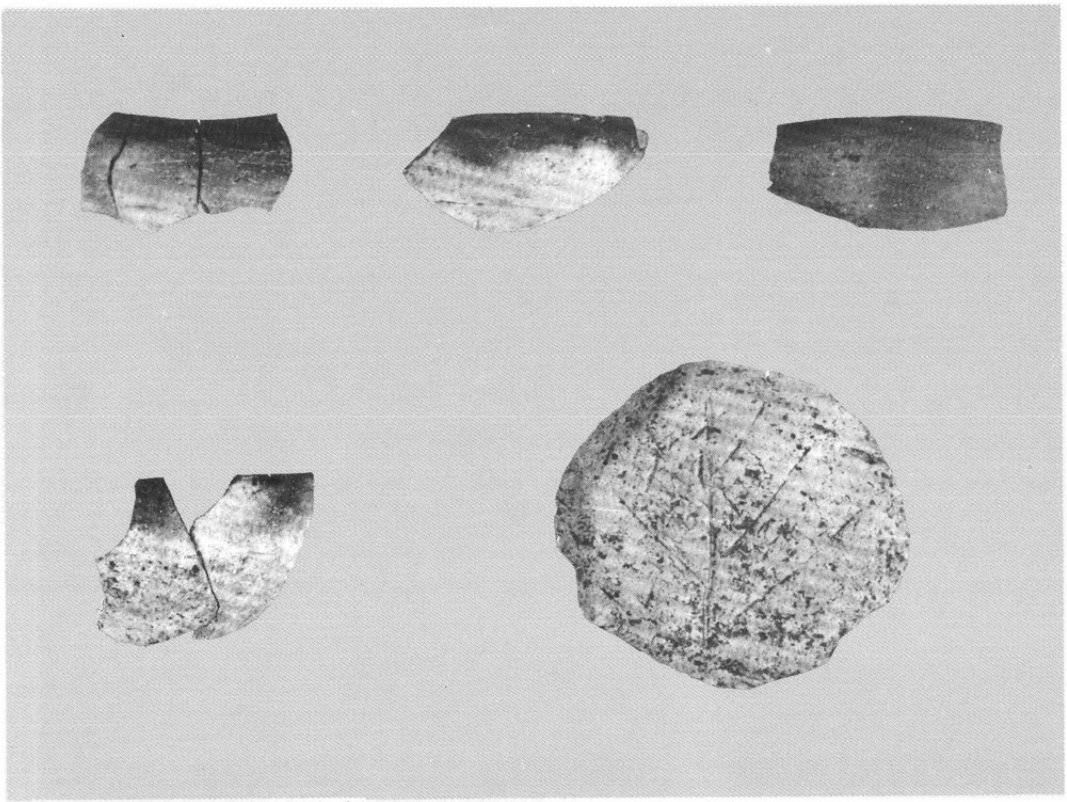
2　第III区1号土壙（北から）

図版 12 出土遺物（土器）

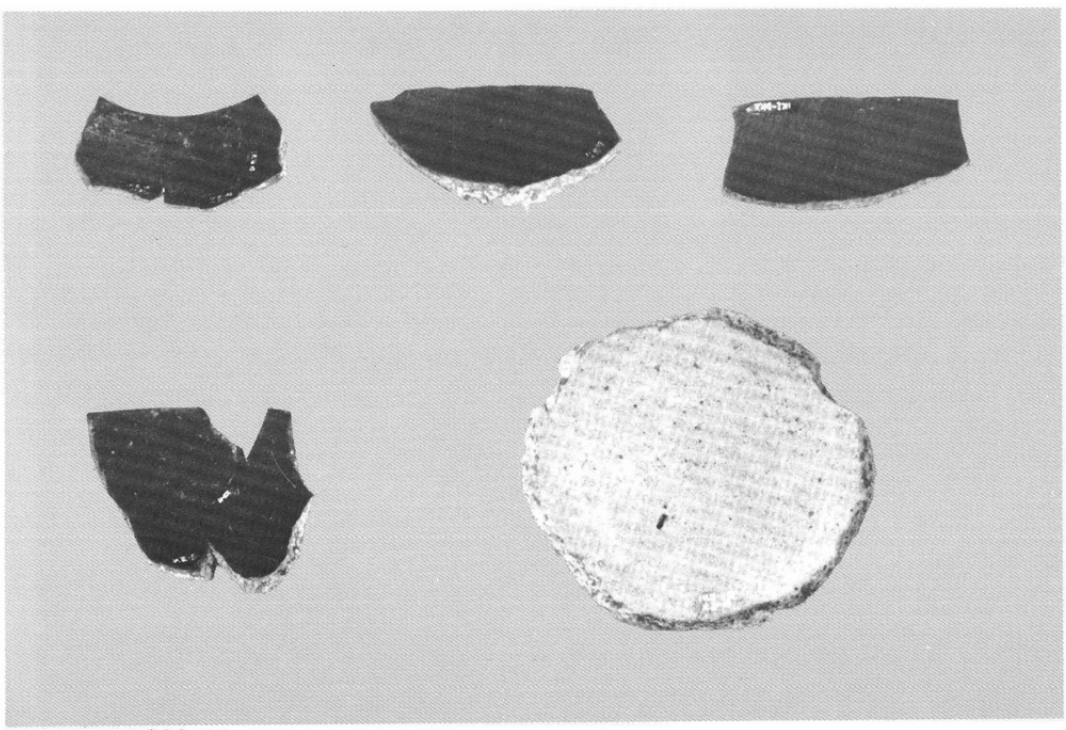


土師器　甕　1/3

図版 13 出土遺物（土器）

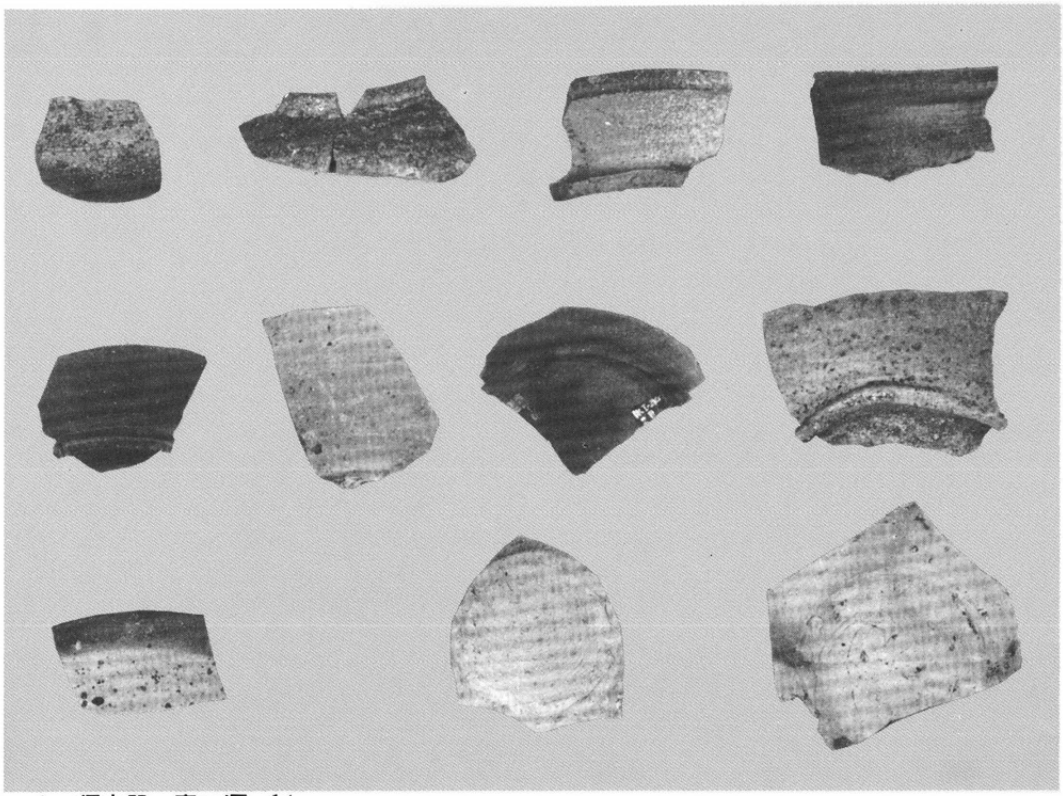


1　内黒土器・甕底部（表）1/3

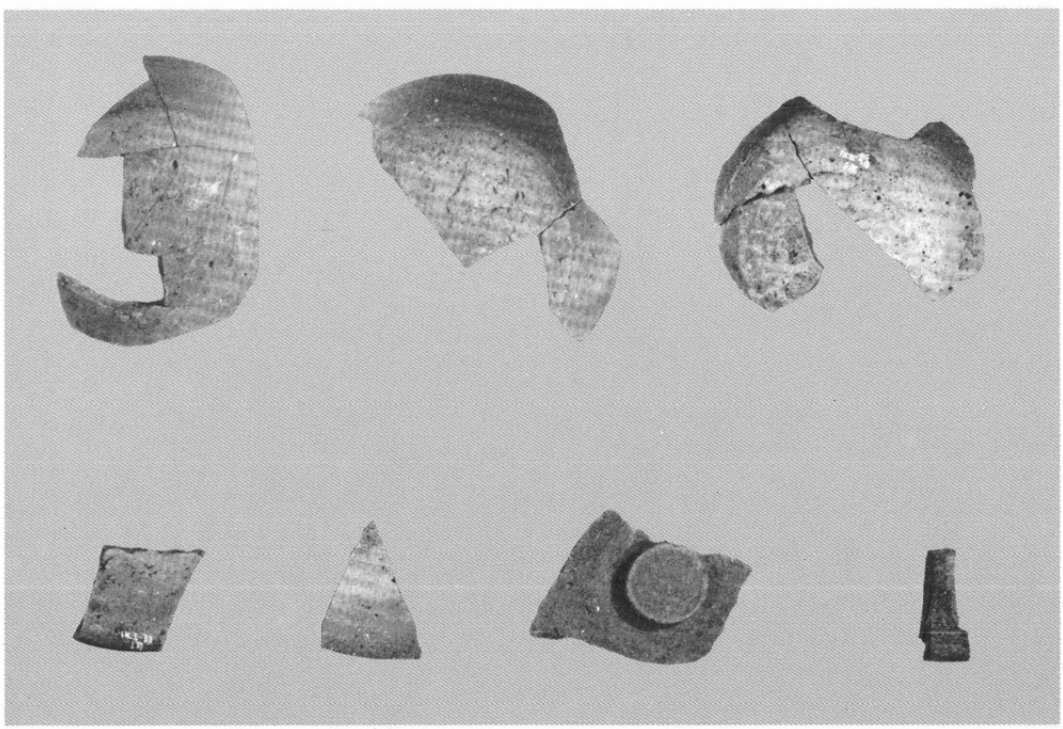


2　同上（裏）1/3

図版 14 出土遺物（土器）

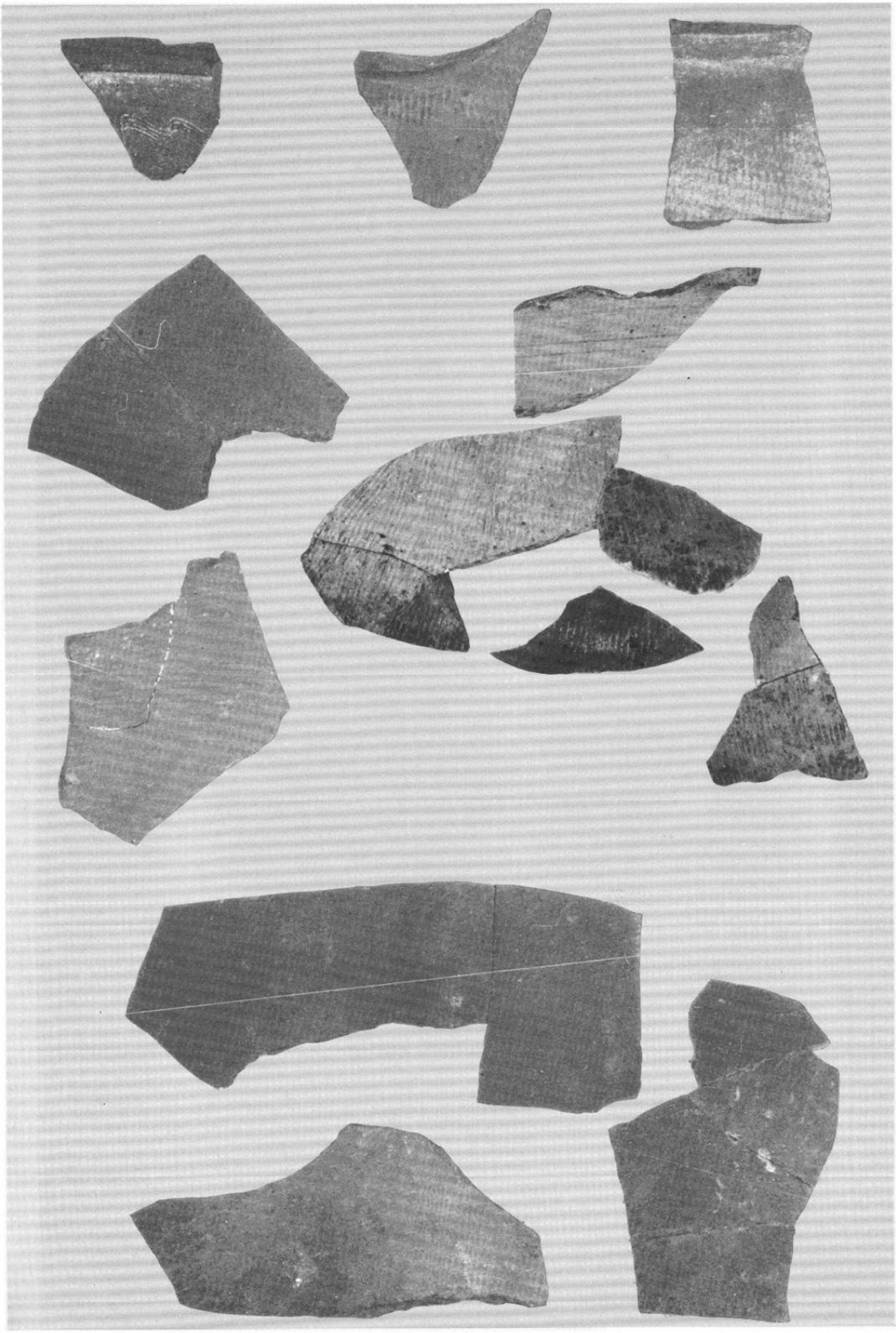


1　須恵器　甕・坏　1/3



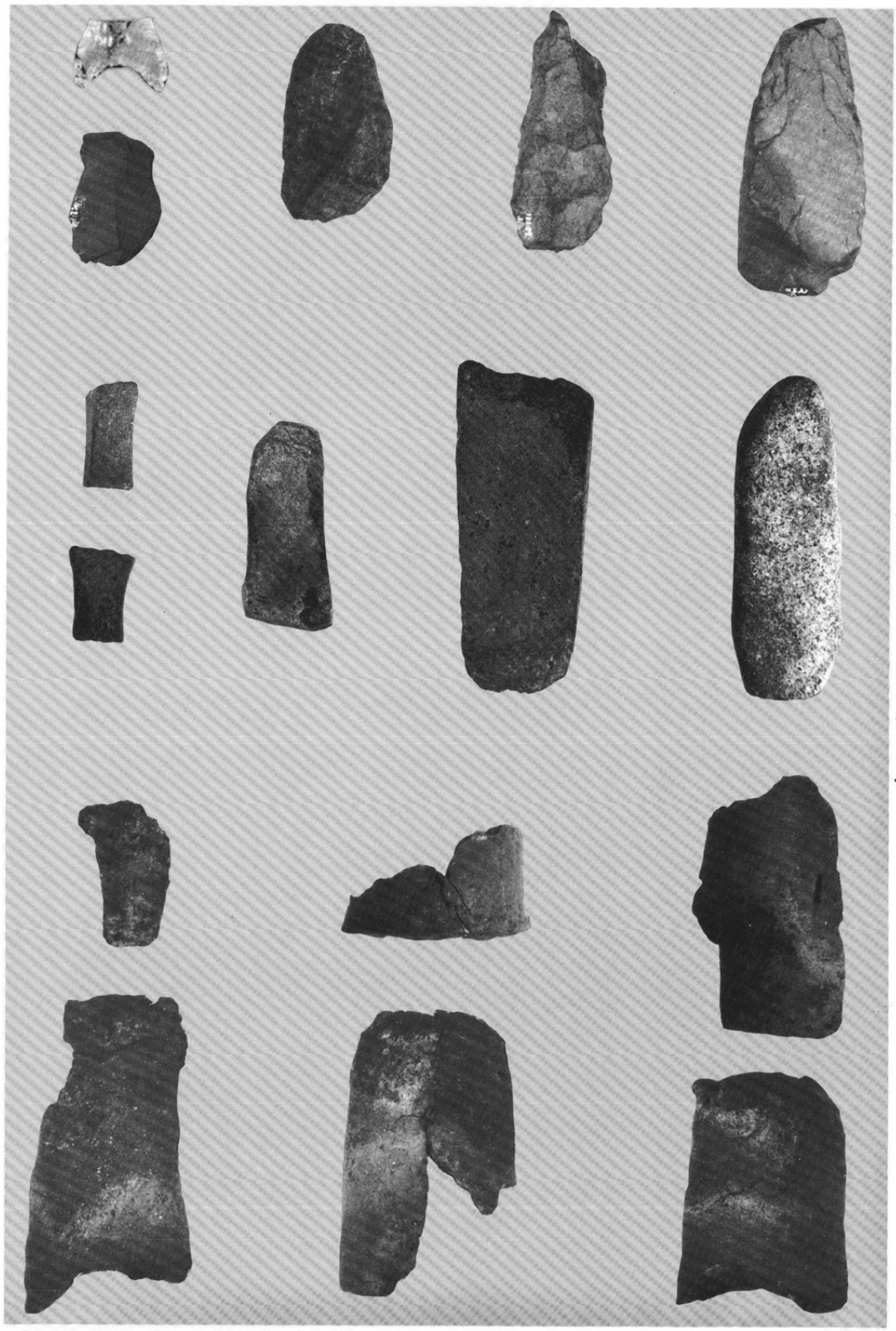
2　須恵器　坏・蓋・円面硯　1/3

図版 15 出土遺物（土器）



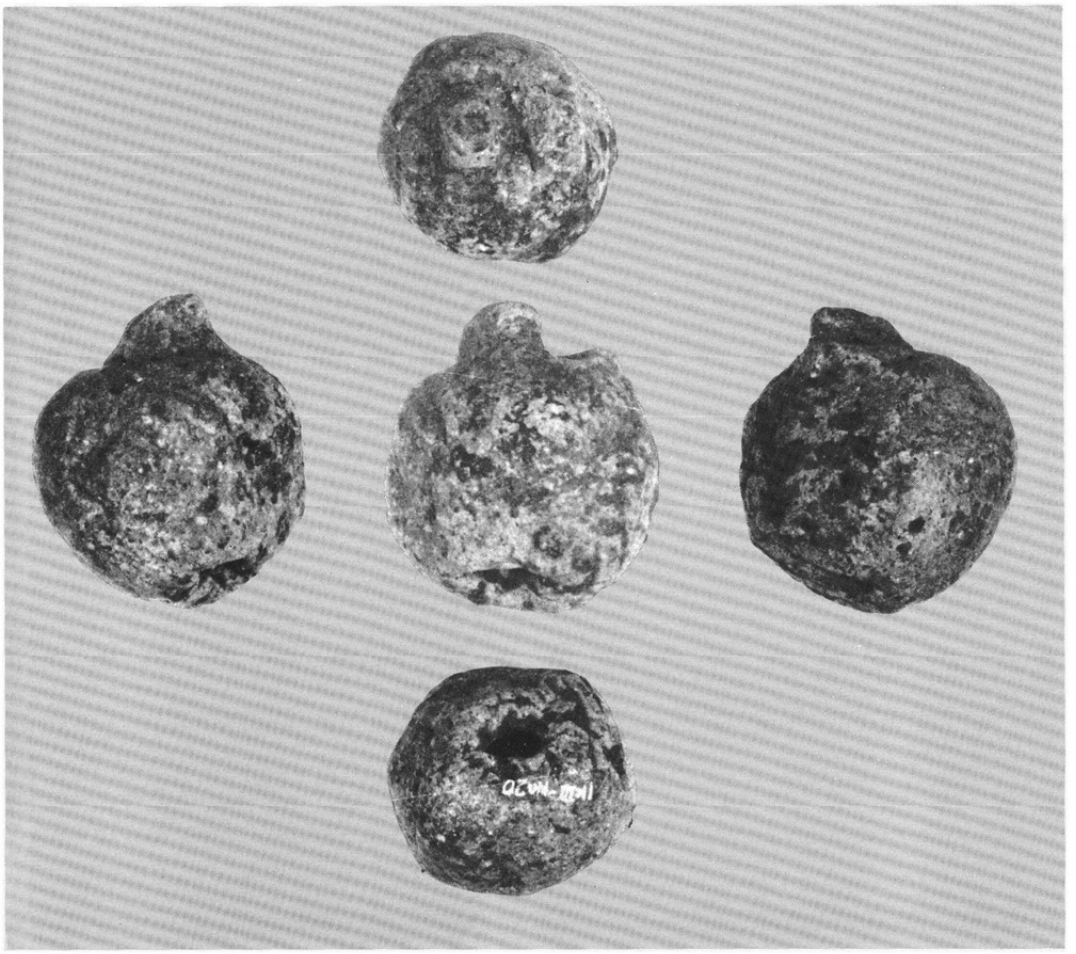
須恵器　甕　1/3

図版 16 出土遺物（石器・石製品・土製品）

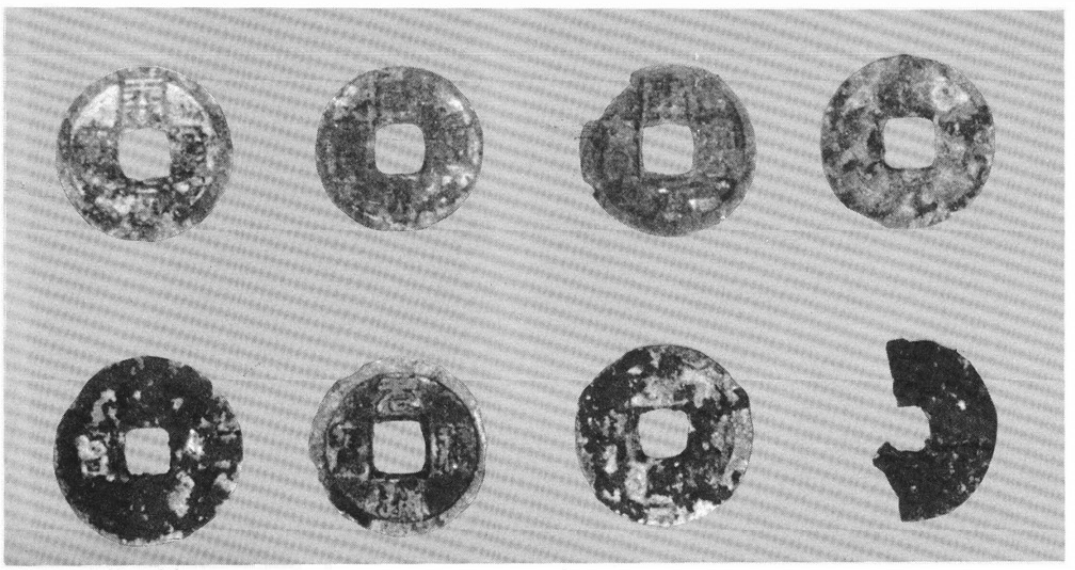


（上段）石鏃 1/1，打製石斧，（中段） 砥石・石製支脚，（下段） 羽口 1/3

図版 17 出土遺物（土製品・古銭）



1　土鈴　1/1



2　古銭　1/1

稲　羽　北　遺　跡

1984年３月25日

編　集／丸子町塩川地区埋蔵文化財発掘調査団
発　行／丸子町教育委員会
〒386－04　長野県小県郡丸子町上丸子1592の２
ＴＥＬ　(02684)２－3147
印　刷／信毎書籍印刷株式会社